東京HEAVEN

いとむぎあむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京ＨＥＡＶＥＮ

【Ｎコード】

Ｎ８３４９Ｃ

【作者名】

いとむぎあむ

【あらすじ】

　逆世界。そこは、普通の人間が踏み入れてはいけない場所である。
死んだ者達はどこに行くのか？死後の世界など存在するのか？
魔王、魔人、魔女、そして霊魂が入り乱れて暮らす現実の世界の反対にある世界「逆世界」。そこに偶然に見せかけた必然でやって来た高校生の、高橋哲平（たかはしてっぺい）。彼の持つ煉獄眼（ディスホールド）を火種に、逆世界は動乱に巻き込まれていく。果たして、その先には何があるのか…？

プロローグ

この世には、不思議な事が沢山ある。そんなことは、誰もが知っている。非現実的なことは、必ず貴方の元にも訪れる。非現実的なことがあれば、当然、非人間もいる。異端者というべき存在のことだ。しかし、“生きてる人間は全員異端者”という説もある。確かにそれも間違いではない。人間だって、その気になれば神様にだってなれるのだからね。

さてと。じゃ、本題に入ろう。

皆さん。“逆東京”という場所を知ってますか？時々ね…東京（こっち）の人が、逆世界（あっち）に来るんですよ。で、もし行きたいっていうのなら、月蝕の日の深夜０時の電車を乗るといいですよ。ね？簡単でしょ。まぁ……帰って来れる保証はありませんけど…。おや？お客さんですか。では。また後程…。

＊＊　＊＊

「あれ？」

僕は揺れている夜の電車に乗っている。他に乗っている人はいない。その手には、打ちかけのメール画面の携帯電話。時間をチェックしようと、腕時計に目を向けた。深夜の０時。

「ん？そんな時間に電車って走ってたっけ？でも、現に乗ってるし…」

僕は夜間学校で６時から１０時までだ。で、学校を出て電車に乗ったのが、１０時３０分だ。おかしい。どう考えても異常だ。なのにどうして現在の時刻が、深夜の０時なんだ？僕はちょっと首を傾げた。すると、電車が急ブレーキで止まり、僕は変な格好で座席か

ら落ちた。
「な！ぬぁ！？」
思わず意味不明な声を出してしまった。どうやら、終点らしいが、駅名がおかしい。

――逆東京駅――

「い…一体ここは…どこだ？」
おやおや。最近は、知らないで来る人が多くて困りますよ。まったく。説明するのメンドーなんですから…。…ん？おや。彼女も乗車してましたか。これは助かりました。でも、まだ揃っていないようなので、続きはまた今度。

逆東京という場所

いらっしゃい。また来てくれて嬉しいよ。実は、役者が集まったんだ。ほら…

僕は今、混乱中である。電車に乗っていたら、終点は「逆東京駅」。てか、どこだよ!?電車の入り口付近で悩む僕。すると、視界の端を誰かが通った。慌てて顔を上げると、そこには同年代くらいの女の子。セーラー服にポニーテールの黒髪。透き通るような翡翠の瞳が、僕を睨んだ。数分ダンマリが続いた。そして、最初に口を開いたのは、彼女だった。

「…あなた…ここがどこだか分かる?」

「あ…ううん」

「そう。…はぁ…、また不用意な客か…めんどくさい。着いて来て」

僕は彼女に呼ばれるまま、黙って着いて行った。着いたトコロは、古い木造の家。今時、木造とは珍しい。ドアを開けると、上のベルが鳴った。

「桑田(くわた)!いる!?」

「あー。はいはい」

と、カウンターの後ろの階段を駆け下りてきたのは、茶髪に少し白髪があり、眼鏡をかけた２０代くらいの男性。オレンジのトレーナーに茶色のズボンというちょっとダサい服装だった。

「どういうこと!客が来たことくらい知っていたでしょ!」

少女は、容赦なく男を怒鳴りつける。男は、さっきまでのヘラヘラ顔を歪めた。

「はい…すいません。忙しかったもので…」

「はぁ…ったく。異端者じゃない人間をひょいひょい引き入れるんじゃないわよ」

「しかたないでしょ。ワタシは、そこまで操作できないんですから」
「っ…。で？君、名前は？」
彼女は、ばっと振り返り、キツイ眼差しで僕に名前を聞いた。
「…高橋哲平（たかはしてっぺい）」
「そう。アタシは、羅刹。歪羅刹（ひずみらせつ）。羅刹って呼び捨てでいい」
「え・・っと。ワタシは、桑田宗助（くわたそうすけ）です。桑田でいいですから」
一応名乗ったが、彼等に聞きたいことは山ほどある。此処はどこか？それで頭がいっぱいだ。
「えっと…突然なんですけど、此処は…どこ？」
二人同時に僕に注目した。
「逆東京。死んだ魂が生活する天国のようなトコ・・・っていうのが、分かりやすいよね？」
「そうよ！もうっ」
「し…死んだ…魂！？」
「そう。人間だけじゃないわ。動物の魂もここに来る。で、桑田はここにやって来る新しい魂と生きた客人を出迎える役目を持っている」
「え…？じゃあ、羅刹も？」
「全然違うわ。アタシは、魔女だもん」
「ま、ま、魔女ぉ！！！？？？」
「…そんなに驚くこと？」
「だって・・どう見ても、普通の女の子にしか…」
その言葉に、羅刹は眉を顰めた。
「…ふぅん。アンタから見たら、アタシは普通の女の子なんだ」
怒っているわけではなさそうだ。ただ、明らかに否定している。
“普通”という言葉に反応したトコロを見ると、その言葉は禁句らしい。
「…さてと。せっかくのお客です。ゆっくりと見物していくといい。羅刹さん、付き合ってあげたらどうです？」
「…別にいいけど」

少し剥れた顔で返事をした。そして、静かに店のドアを閉めた。

はぁ…。…え？どうしてため息なんかついてるかって？…それは、少し残酷な事があったからですよ。まぁ、今日は疲れたんで、またのお越しをお待ちしてます。

やぁ。また来てくれたんですか。嬉しい限りです。さぁ、どうぞ。

お互いまったく会話のないまま歩き続ける。高橋哲平と歪羅刹。
哲平は、興味深そうに周りをキョロキョロと見た。
「…田舎者みたいじゃない。気になるからやめて」
「いや…ごめん。外とあんまり変わらないな、ってね」
「…まぁね。死んでもなお、上に居たがる連中が大勢いる。だから、上と何の変わりもないように設計したの。設計者は、桑田」
「桑田さんが…？」
「えぇ。アイツは、一応ここの責任者だから。あの家は、役所みたいなもの。あそこで、入国手続きやることになってるの。アタシたち魔女は、特別。この場所を与えたのは、魔女だからね」
「へぇ…羅刹ってすごいんだ」
「！…うるさい」
哲平は、少し可愛いと思った。その時。プリプリ怒っていた羅刹の足が止まった。
「……」
「何？どうしたの？？」
「…来る」
と、いきなり走り出してしまった羅刹を、何も分からず追いかけた僕。その目の前の光景に僕は息も止まりそうだった。沢山の黒い顔の集まったもの。その顔一つ一つが、叫び声を上げげている。
「やはり、来たか。神霊」
「へ？神霊…、ちょっと待った！！」
「…何？」
「神霊って、神の霊って書いて『神霊』だろ？」

「そうよ。それ以外に読み方なんてないじゃない」
「いや、あるんだけどさ…。じゃなくて、要するに神様の霊だろ！？倒してどうすんだよ！？」
「…神様って言っても、煉獄界の神よ」
「煉獄界？」
「そう。元々、逆世界と地獄の間にあった煉獄界。昔、“ある罪”を犯して、神に煉獄界ごと堕とされた煉獄王がその憎悪から、上に神霊を送っては、破壊しようとしているの」
「え！“ある罪”…？」
「のんきなこと言ってないで、隠れてなさいよ！」
羅刹に睨まれ、哲平はゾッと身を震わせた。そして、建物の陰に隠れた。羅刹はスカートを少したくし上げ、太ももに着用していた細長い銀の針を三本指の間に挟めた。
「さぁ、来なさい！！」
羅刹の声と共に神霊たちは、羅刹に一直線に向かってきた。少し苦しそうに顔を歪め、銀の矢を一本一本自由に操った。しかし、後ろから見ていた哲平は、はっとした。羅刹の背後から忍び寄る神霊がいることに。

「羅刹！！！」

そして、その瞬間に“アレ”が開いた。赤い光りを放つその眼は、神霊を忽ち炎で焼き尽くした。羅刹はその光景に目を丸くした。
「煉獄眼（ディスホールド）…！」
「ほぉ…こんな少年に…ね」
「！桑田！！いつの間に…」
「ま、彼を連れて行きますよ」
「…分かってる」

その場に眠ってしまった哲平を桑田が負ぶって、家に戻った。

＊＊＊　＊＊＊

哲平が目を覚ますと、左目は真っ黒で、何かに視界を遮られていた。なんとか見える右目で、辺りを見回した。そこは、桑田の家の寝室らしい。何が起こったのか理解出来ず、哲平は少しうろたえた。するとそこへ紅茶のカップを持つ桑田と羅刹が不機嫌そうな表情で入ってきた。
「やぁ、目が覚めたんだね？」
「あ、はい」
「まったく…世話掛けさせないで」
「…ごめん」
「まぁまぁ。さてと、哲平君、君は先ほど何が起こったのか、覚えているかい？」
「ん…、全然」
「…やはり」
「…桑田さん、この眼帯…？」
「…あぁ、取っちゃダメだよ。取ったら、封印が解けてしまうからね」
「ふっ、封印？」
哲平はなんだか、頭がクラクラしてきて、ベッドに倒れた。
「哲平君、君は自分が死人だという感覚はあるかい？」
「あ、ありません」
「…歪クン、これは…」
「えぇ、多分ね」
「？」
「…哲平君、君は魔人の一種かもしれない」
「まっ、魔人!？」
「そうだ。君は、さっき歪クンを助けるために、左目のコンタクト

を無意識に取ったろ？」
「ん〜…そうかも」
「それだ。君は、左目の視力が極端に悪い。その原因は、左目が魔人のものだからだ。煉獄眼（ディスホールド）と言って、ある特定の魔人しか持っていないといわれる、とても貴重な魔眼だ。しかし、時々極稀に死んだ人間に自然に移植されることがあるんだ。しかし、君は死んでいない。…て、ことは…」
「僕は…魔人？」
「そ」
唐突にそんなことを言われたが、理解や飲み込みの早い僕は、得に焦ることもなかった。
「ってことは・・・僕の両親のどっちかが、魔人ってこと？」
「そうなるね」
「ん〜…父さんかな？母さんかな…？」
「ふむ、そのことなんだが…」
「へ？」
「実は、十九年前に行方不明になった一人の魔人がいてな…」
「えっと、名前は？」
「ツバサ…という」
「嘘！それ兄貴の名前だ！」
「お兄さんか…転生か？」
「違う。ツバサは、そんなセコイことしないわ。多分、記憶を少し変えたんだと思う。そして、生まれた弟に魔眼を移植したのよ」
「兄貴が…」

「その通り」

「ツバサ！」
「あ、兄貴！！」
そこに立っていたのは、哲平の兄にして魔人のツバサだった。茶

髪に長身のいかにも兄のような青年だった。
「兄貴…なんで僕に…これを…？」
「ん？まぁ…素質があったわけだし」
「不本意よ、ツバサ！！」
「おいおい、久し振りにあった彼氏にそれはねーだろ？」
「か、彼氏！！！」
「歪クン、それはこの桑田も初耳ですよ」
「うぅ…昔のよ！！」
「おや？とか言って、毎日手紙送ってたの誰だよ？」
「うるさい！！」
「ツバサ君、説明してくれるか？」
「あぁ。いいだろう。すべて、話そう」
ツバサの口から語られる真実に僕は、少し恐怖を感じてならなかった。

託されたものは

僕は昔っから、左目を触られるのを嫌がっていた。その光景を見るたびに、兄貴は眉間にシワを寄せ、申し訳なさそうにしていた。僕はそれが不思議でならなかった。

逆東京で出会った歪羅刹と桑田波子。そこへ迷い込んだ少年・高橋哲平は、実は煉獄眼（ディスホールド）の持ち主だった。そして、哲平の兄・高橋翼は、魔人の一人だった。

「話そう。すべての元凶を」
「元凶？どういうことなの、ツバサ」
「羅刹、そんなに焦るな。まずは、俺が何故現世に足を運んだのかだ」

＊＊＊　回想　＊＊＊

「魔人、ツバサをリストから抹消する」
「大魔人様方！何故ですか！？」
「うむ…。あやつは、我が逆東京に災いを齎す者。魔人の名を汚すものをいつまでも、リストに残しておく理由もいらん」
「しかし…」
「桑田君。君は、ただの“管理者”だろう。此方の揉め事に口を挿むな。ツバサは、我等が許可するまで、地上に追放する」
「っ…」

「悪かった。なんとか食い止めようとしたんだが…。まるで聞き耳持たなくてな。歪クンには僕から言っておこう」
「あぁ。頼むよ、桑田」
「…いいのか？」
「まぁな。羅刹は怒るだろうな。あまり詳しくは教えるな。アイツ、きっと評議会に文句つけにいっちまうからな」
「ツバサクン。…！それは！？」
「あぁ。俺の最後の研究の成果だ。……煉獄眼(ディスホールド)。完成とまではいかなかったけどな。これは、地上に行った時、誰かに譲るつもりだ」
「人間に！？」
「まぁ。命の保障は出来かねまいが。ちょっと、面白い家族を見つけてね」
「面白い家族？」
「ま。いずれ分かるさ」
そう言って、御堂(みどう)ツバサ、第三レベルの魔人は地上へと去っていった。試作品の煉獄眼(ディスホールド)を持って。

＊＊＊　＊＊＊

「そんなことが…」
「ツバサクンは、レベル3の中では、得に力の強い魔人だったたからね。結構好き勝手にしていたらしい。そのせいで、評議会から追放命令が出されたんだ」
「レベル3？」
「そうだ。魔人にもレベルがあってな。最低レベルが5．最高レベルが1．ツバサクンはその中間ってことになるね」
「兄さんが…、僕にあの目を…」
「分からないわね」

羅刹がツバサに疑問をぶつけた。いつも以上に不機嫌だった。ツバサはやれやれと言いたげな顔で、溜め息一つ。
「何がだい？」
「なんで、ただの何も知らない人間に、そんなものを託したの？自分に移植すればいいのに」
「そうだな。けど、俺じゃダメなんだ」
「？」
「俺は……、もうすぐ消える」

「「え！？」」

ツバサの突然の知らせに、羅刹と哲平は、驚きを隠せない。桑田は、その事に苦痛の表情を浮かべた。
「俺の体は、長い間地上にいたせいで、色素が薄くなって、内部はガタガタだ。明日にでも崩れそうだ」
ツバサは透けていく右手を見つめ、必死に微笑んでみせた。羅刹は握った拳を震わせ、白い頬には、涙が伝った。
「嘘だ！アンタは、母親を超える魔人になるって！言ったじゃないの！！こんなとこで消えてどうすんの！？」
「羅刹……――ッ」
ツバサは背後にあった電柱に凭れ掛かり、サラサラと体が所々に砂になっていくのを見ながら、優しく微笑む。
「…優しいね。羅刹は変わらない。いつも頼りない俺を庇ってくれる。そこは…蘭姉さんに似てるね」
「うるさい！最後の最後まで姉さんと一緒にするな！！」
「悪かった。もういいよ。こんな俺のために泣かなくて……。哲平。君に魔人の資格を与える。高橋哲平を捨て、こっちでは『御堂隆樹（みどうたかき）』と名乗れ。お前は半分人間だ。人間界で過ごしても問題ない。君は、人間の行く末と逆東京の行く末を担う新しい魔人だ。……元気でな。楽しかったよ。……――」

砂になった手が崩れて地に虚しく落ちる。除々に砂になっていくツバサを見つめる哲平は、無になったツバサに、そっと口を開く。

それは、ほんの刹那だった。

「ツバサ…？」

緊急招集

ボロボロになった魔人の最後は虚しい。誰にも見取られず、いつの間にか灰になっている。残るのは、その人といた時間と言う名の記憶。魔人は滅んだと言われるほど存在の薄い種族。だから、魔人は生きた証を絶対に残す掟がある。ツバサが残したのは、『御堂隆樹』という名の新しい名の半人半魔。本名「高橋哲平」。

現在の東京。星稜高校。

「高橋！」

哲平は名を呼ばれ、振り返るとそこにはクラス委員の荻玲子がいた。

「高橋！この前の進路調査プリントはどうした！？」
「ギクッ！」
「キョーは逃がさないわよ！！」
「やべっ！」
哲平は身の危険を感じて、廊下を駆け出した。それを追いかける玲子。それを見て、同じクラスの男子は、
「あーあ。またやってるぜ」
「懲りないな。痴話喧嘩」
「いや…、違うだろ？」

そして、その中に。

「迷惑。邪魔。どけ」

「「あ！」」
二人の間に入り、片方の手でそれぞれ二人の顔を鷲掴みにしたのは、紛れもなくあの歪羅刹（ひずみらせつ）だった。彼女は少々変わった少女で、本当は異界の魔女。哲平だけが知っている真実。
「羅刹！？」
「歪さん！？」
「邪魔。痴話喧嘩なら余所でやって」
「「だから、痴話喧嘩じゃない！！！」」
「息ぴったりね。…哲平、今日…分かってるわよね？」
「あぁ。分かってるよ」
「へ？何、何？」
「それじゃ」
羅刹はいつにも増して不機嫌そうな顔をして、二人の間を通り過ぎた。玲子は馬鹿らしくなり、プリントの提出日だけ教えて、その場を立ち去った。

そして、零時出発の逆東京行きの電車が、人間界に留まっていた大勢の魔人たちを乗せて、出発する。その中に、羅刹と哲平の姿もあった。腕を組んで窓の外を眺める羅刹と、その隣の席に座り、読書する哲平。すると、羅刹が哲平に視線を移し。
「哲平。分かってるわよね？逆東京（あっち）に言ったら、『御堂隆樹』よ。くれぐれも下界の名前で名乗ってはダメだよ」
「うん。分かってる」
「そう。…緊急招集。大魔人は、何を考えているのかしら？」

逆東京。そこは、死んだ魂たちが居住まう場所。羅刹は、まずは桑田の家に向かった。相変わらず、ゴッチャリとした部屋だ。本の山は、一行に減らないし。この前掃除したはずなのに…。
「や、やぁ。いらっしゃい。歪クン、隆樹クン」

「えぇ」
「あ、はい」
やはり、名前が二つあるというのは、慣れない。兄貴もそうだったのだろうか？
「今日は、私も行きますよ」
「大魔人は、管理者も招集したの？」
「えぇ。私以外にも、各逆県の管理者が招集されました」
「…歓迎にしては多い人数だな」
羅刹は急に難しい顔をした。羅刹が悩むところを、俺は初めて見た。
「大会議でも開くつもりか。桑田、これはお前にも火の粉が掛かるぞ」
「ま、予想は大体出来てますよ。それが仕事ですから」
「ふ。そうか。では、行こうか」
羅刹は黒のポニーテールを靡かせ、妖しく微笑した。

逆国会議事堂。中は全然変わりない。一度テレビで見たことがある。結構でかい。しかし、集まって座るのは、魔人。そこが表の世界との違い。
「俺、ここでいいの？」
「あぁ」
「…桑田さんは？」
「アイツは管理者たちの席だ」
周りには、自分たち高齢者が多く、殆どが老人や老婆。羅刹の年輩達だろう。…あれ？魔女ってどれくらいの地位だろ？
「静粛に。大魔人のお越しだ」
白ヒゲの老人が扉を開けると、そこから合計五人程度の大魔人たちがやって来た。結構若い魔人から、女の人が一人、老人が多い。あの女の人、少し羅刹に似てる。

「蘭玉（らんぎょく）様。こちらです」
「えぇ。…あら？羅刹が来てるじゃない」
「はい。何でも、新人魔人の付き添うだと」
「へぇ…。じゃ、隣の子がそうなの？」
「はい。おそらく」
「ふふ」
和服に身を包んだ女性は、扇子を広げて微笑んだ。

視線を感じた羅刹は、強く女を睨んだ。
「あの女…っ！」
羅刹の怒りを押し殺すような声に、俺は身を震わせた。

「さぁ、始めよう。魔人大会議を」

生き様と結果

表と裏。光と影。太陽と月。

世界には対成るものがある。そして、それゆえに世界は動く。けど、少年は対なる二つの自分を手に入れた。どちらにも属することもなく、少年は二つの境界線の上で生き続ける。

逆国会議事堂。

「それでは、始めようか。議会を」

刹那。隆樹（哲平）はごくりと唾を飲んだ。羅刹はずっと女の人を睨み続けていた。

「さぁ、蘭玉様から」

「えぇ。今回、この四天王が一人、歪蘭玉（ひずみらんぎょく）が議会を仕切らせていただきますわ」

あれ？『歪』？羅刹と同じ苗字だ。…てことは？

「あれは、私の姉だ。あんな女と同じ腹から生まれたなどと、考えたくもない！」

「へ？もしかして、仲悪ぃの？」

「仲悪いとかそういうレベルじゃないわよ！」

あはは。もんの凄く仲悪いわけだ。でも、優しそうで綺麗な人なのに…。

「さぁ。議題に入りましょうか。異端魔人、ツバサから意思と煉獄眼を受け取った新人魔人、隆樹君についてよ。長老たちは、処分したがってるけど、私的にはとりあえず、異端審問ということにしたいのですが…」

「お待ちください！」

そこで立ち上がったのは、後ろの席に座っていた桑田だった。

「逆東京都管理者、桑田宗助（くわたそうすけ）。何か意見でも？」

ゾクッ…

桑田は、蘭玉に少し睨まれただけで、身体を強張らせてぞっとした。隆樹も一瞬、空気が氷付いたかのように、息が出来なかった。

「…。この者を僕に譲ってはもらいませんか？」

ザワ…ッ

一瞬周りがざわつき、羅刹もその言葉に唇を噛んだ。

「っ…。馬鹿がっ！」

「それは正気か？」

「はい。この者を、僕の管理する東京都の護柱（ナイツ）に加えたいのです」

「！待て桑田！まだ私と狐目しかいないんだぞ！」

「だからですよ、羅刹クン。一人増えたことによって、こっちの警備も堅くなるでしょう？二人だけじゃ、少し不満です。それに、煉獄眼はとても興味深いですからね」

「…分かった。もう何も言うまい」

羅刹はぼんっと自分の席に座り、立っていた蘭玉も静かに座った。どうやら、納得してくれたらしい。

「いいでしょう。だが、もし何か問題があれば、その時責任を取るのは、お前だと思え」

「承知の上です」

「それでは結論を言い渡す。新人、御堂隆樹は、逆東京都の護柱（ナイツ）に着任。これにて、議会を閉会する」

「は！」

＊＊　＊＊

逆国会議事堂前

「羅刹」
「！蘭姉さん」
「ちょっといいかしら？今から」
「……えぇ」

羅刹と蘭玉がやって来たのは、墓地。ツバサと歪家の女王と呼ばれた二人の母、蘭星（らんせい）の墓石が並んでいた。
「…ツバサは、笑ってたのね？」
「えぇ」
「…よかった。よかった。…だって。お母様」
「…知ってたの？私達とツバサが、実の姉弟だったってこと」
「えぇ。育てられなかった赤子のツバサを孤児院に届けていた時、私も一緒だったから。そして、母様に、」

『いい？このことは二人だけの秘密よ。ツバサだって、歪家の跡取りになるより、きっと嬉しいから。今度生まれる子にも内緒よ？』

「って。だから、私はアナタにも言わなかった。けど、アナタは彼と出会って恋に落ちてしまった。いけないの。折角母が引き離したのに…」
「…後悔はしない。たとえ、実の兄だったとしても。私は、ツバサを愛していた。その事実は、決して変えられない。変わりはしない

の。変えさせないわ、姉さん」
「…そうね」
「…。隆樹（アイツ）は、ツバサの生き様だ」
羅刹は、静かに、母の墓石に向かって、微笑んだ。

生き様と結果（後書き）

次でZの章は最終回。

エピローグ

おや。お久し振りですね。今日は僕、桑田宗助（くわたそうすけ）が司会をやらせていただきます。

まずは、この場所のことをお教えしましょう。

『逆世界』。君達がいる世界の逆にあるもう一つの世界。鏡のような世界。しかし、ここに来れるのは、魔人、魔女、それと死んだ魂。ここは、云わば天国というところだ。何故普通の世界のようなのかというと、

『ここに来ても、魂たちが普通に人間として、そして上に未練を残している魂のために、魔女が設立したのだ』

だそうです。魔女というのは、魔人たちより地位が高い者たちのことです。魔女は一応女性だけですから。…おっと。ここから先は、また次の機会にでも。

さて、次は僕のことです。

僕は、桑田宗助。逆東京都の管理者です。

次は、僕の友人、歪羅刹（ひずみらせつ）クン。僕の知り合いの中で、唯一の魔女格の人です。無愛想ですが、とっても綺麗で優しい人ですよ。

次は、僕が初めて出会った人間、高橋哲平（たかはしてっぺい）クン。実は、半人半魔だったんですよ。しかも、煉獄眼（ディスホールド）まで持ってました。

次に、羅刹クンの元彼氏で、追放処分を受けた魔人、御堂ツバサクンです。彼は地上で、『高橋翼』として生きていたそうです。

これで、一通り人物紹介は終わりです。続いては、煉獄眼についてて。

煉獄眼。それは、すべてを破壊する力です。これはツバサクンの実験の産物で、現在は哲平さんが持ってますよ。

ま。今回のことは、これで全部でしょう。…え？羅刹クンの家族ですか？それは、次の章を見てくれれば、分かります。それでは、また後、良い夢を見ましょう。

——THE END——

エピローグ（後書き）

これで、Ｚの章は終わりです。全七話（短っ！）。次回作、Ｙの章は、七月頃にと企画してます。

お楽しみに！！

プロローグ

『逆日本』　そこは、死んだ者と魔人、魔女たちが集う世界。

高橋哲平。別名：御堂隆樹。彼は、魔人科学者、御堂ツバサにすべてを託され、仲間を見つけて、この逆の世界にも身を置いている。けど、もう一人の「哲平」を捨てたわけではない。彼は、二つの仮面を使い分け、この地上で生きていく。

歪羅刹。哲平の同級生の魔女。逆東京都の桑田の作った「護柱」の一人。哲平に煉獄眼を与えた御堂ツバサの恋人。歪蘭玉の妹。現在では珍しい魔女の一族の生き残りである。

桑田宗助。逆東京の管理者にして、護柱を作った人物。だらしなくて、散らかし癖があるが、頼れるお父さんキャラ。いつもニコニコしているけど、怒らせると、羅刹でも手が出せないほど。

彼等の物語は、今始まった。

今日も、学校が終わってから桑田の家に集合することになっている。昼間はバイト、夜は学校で深夜には桑田の家。いくらなんでも、ハード過ぎる。俺の…いや、今は僕か。僕の体が持たない……

そして、深夜零時。いつも通り、適当な電車に乗った。制服のま

まで。そして、駅名が僕の目を通り過ぎる。

『逆東京駅』

扉が開き、何人もの魔人、魔女が出てきた。哲平も『隆樹』に性格を変えた。そして、駅から１０分で、桑田の家に着き、ドアを開ける

「おっス。らせ――「馬鹿者がァ！！！」おぶっ！！」

羅刹の投げた分厚い辞書が、隆樹の顔面に直撃。何故なら、受けるはずだった桑田が避けたからである。

「「あ…」」

「テメーら・・・っ！」

隆樹は怒りパワーによって、辞書を握りつぶした。これには、さすがの羅刹も硬直。ワナワナと拳を震わせる隆樹だったが、さっきので顔を腫らせ、倒れてしまった。

隆樹の額に湿布を叩くように貼る羅刹の機嫌は最悪。

「ありがとう、羅刹」

「別に。アンタのためじゃないし。で、問題は桑田よ」

「アハハ。先ほど説明した通りです」

「コイツ、これからやる筈だった実験用の用具と魔薬(まやく)をぜーんぶダメにしちゃったのよ！？信じられない！！」

ナルホド。これなら、羅刹じゃなくてもブチ切れるはずだ。で、羅刹の話では、その魔薬が売っている店の店長が、こんなこともあろうと予測して、全部予備に用意していたそうだ。羅刹は、桑田と部屋の掃除をするため、俺一人で行くことに。

『魔薬専門店　蘭瑛(らんえい)』の看板の怪しい店。悪臭漂う店内に進むと、奥の机には、銀髪の煙管を咥えた若い青年がいた。第一印象、銀色

の狐…？
「やぁ、いらっしゃい。キミ、桑田のとこの新入りさんやろ？ボクも話聞いとりますわ。ボクは、バイト人の内海妖いいますわァ。以後、よろしゅう。実は、店主が風邪引いといてな、店番やってんのや」
「は、はぁ…」
簡単に握手を交わすと、妖が奥から大量の薬品と器具を持ってきた。
「台車か…、しかも二台。キツイな…」
「なんなら、お手伝いしましょか？」
「え？いいんですか？？」
「ええよ。店番も飽きたしなァ」
妖は扉に閉店と板をかけると、二台を引き始めた。

そして、休み休み桑田の家に着いた。
「羅刹！持ってきたよー！」
「はいはーい――」
「久し振りやなァ、羅刹ちゃん♪」
「なっ！？狐目！！」
羅刹は、殺気を放った。隆樹はどうしたらいいかと、オドオドしていた。すると、そこへ桑田が入り込んできた。
「はいはーい。ここで喧嘩しない。やぁ、久し振りだね。妖クン」
「いやァ。結構な嫌われようやな…。お久しゅう御座いますわ、桑田さん」
「えっと…、どういうこと？」
「あぁ。彼は、護柱の一人、内海妖クンなんだよ。知ってる人は少ないけどね」
「え……？えぇぇぇぇ！！！？？？？」

ま、マジっすか！？

プロローグ（後書き）

＊予告

俺の新た生活の中、現れた同じ護柱の内海妖。いつも通りと思っていた中、何かが起きようとしていた。

次回『不穏な動き』

不穏な動き

人間とは不思議なものだ。我々、魔人や魔女たちはすぐ隣にいるのに、それに気付かない。どうして、気付かない？それは、見ようとしないからだ。

内海妖（うつみよう）。護柱（ナイツ）の一人。氷帝の王子という異名を持つ魔人である。

「いやァ～。聞いた通り、面白い人ですわァ。御堂クン」

「…はぁ」

「っ……」

羅刹は、必死で怒りを堪えいる。そのことを知ってもなお、妖は態度を一向に変える気配を見せない。飄々としたその態度、あれは羅刹じゃなくてもイライラするな。それが平気な桑田さんって一体……；

「で、用件はなんなの！？妖」

やばっ！羅刹がキレる寸前だ！一体この二人、何があったんだ！？

「え～？ちょっと、遊びに」

ブチッ

あ。キレた。何かが切れた。

「貴様ァ！！！用件がないなら、ここに来るな！！！もう我慢の限界！ここで細胞一つ残さず、その存在を完全抹消してやる！！！！」

「わぁ！羅刹、ちょっと落ち着いて！！」
「黙らっしゃい！！！もう我慢出来ない！！いっぺん死んで、その性格直してこーい！！！」
「ま、そうもいかへんようやで」

ドドドドー――――――ッ

「「「！？」」」
「魔女さん目当てで、神霊がごっさ集まりおってで」
「チッ！下等共がっ！隆樹！お前は桑田といろ」
「おう！」
「ほな、いきましょか」
「フン」
二人が外に出ると、そこには空を飛ぶ蟲系の神霊が飛びかい、家を取り囲んでいた。
「多いわね。いける？」
「楽勝や☆」
妖は、甲にアイスブルーの結晶のはめ込んであるグローブをはめ、羅刹は銀の長針を構えた。隆樹は、桑田を後ろに下がらせた。黒い球体がウジャウジャと宙を舞い、ピピと切れ目が出来たかと思えば、そこからギョロッと目が開いた。そして、その下から涎を垂らして牙を剥く口。凶暴なおたまじゃくしと言ったところか。

ま、それはさておき。
「さ、どっちが多く倒したか、競争よ」
「ええよ。全勝無敗の記録、破ってみぃ」
「望むところ！」
二手に分かれた羅刹と妖。まずは、空中から襲ってきたおたまじゃくしたちを台にして、ひょいっと、おたまじゃくしたちの攻撃を

避け、針を後ろからぱっと投げた。そして、手をぱんと打ち合わせ、

「火射万灰（かしゃばんかい）！！！」

　印を結ぶと、刺さった針から火の粉が噴出し、おたまじゃくしは焼き払われた。

　その頃、蟲たちの相手をしていた妖は、おしりの針を向けて向かってくる巨大蜂の攻撃を軽々とかわし、足で氷の陣を描いていた。そして、トンと踵（かかと）を鳴らすと、陣は光り出し、地面から突き出した氷の柱が、周りの巨大蜂を串刺しにした。

「いっちょ、上がりや」

「ちょっと！蟲系はそっちで始末してって、言ったでしょ！？」

「あ〜れ〜？もしかして、羅刹ちゃんって蟲、苦手やの？」

「っ！（カァ〜〜〜）」

　あ、図星なのか。羅刹にも可愛いとこあるなァ…。

図星だと知った妖は、「可愛い」と漏らし、ククッと笑った。それに恥ずかしくて、羅刹は顔をどんどん、林檎のように真っ赤にしていく。

　じれったい二人の攻撃に、苛立ちを憶え始めた隆樹は…、

「あー！もー！いい！！二人共退いてて！！！じれったいんだよ！俺が一掃する！！」

「ちょっ！まさか！？」

「お？」

≪発動！煉獄眼（ディスホールド）！！≫

　眼帯をつけてなくても、コントロール出来るようになった煉獄眼を発動させた隆樹。血の色の眼が現れ、強い光を放つと、光に当てられた蟲たちは次々に塵になっていく。それを見て、流石の妖も凝

視した。
そして、一掃後。クタクタに疲れて倒れた隆樹を桑田のベットに寝かせて、横で看病する羅刹を置いて、リビング（いや、もはやただの書類の山だらけの部屋）の明いているスペースにちょっこり、二人で正座する。しかし、その表情は真剣である。
「さて、君の意見を訊かせてもらおうか？妖クン」
「はい。彼は、結構ある意味で危険分子ですなァ。ま、桑田はんがどうしてもってゆうなら、賛成しますよ」
「うん。彼は、確かに危険です。しかし、だからこそ、こちらの支柱に収めておくのが今出来ることですよ。…君は反対ですか？羅刹クン」
桑田が後ろのドアに声をかけると、ドアの陰から羅刹が鬼の形相で、桑田を睨んでいた。
「……結局、アナタは人を、私たちを『物』としてしか見てないのね。彼は、隆樹はアナタの所有物じゃないわ。彼に何かするようなら、いくらアナタでも容赦しない」
羅刹は、さっと部屋に戻っていった。桑田は、怪しい笑みを浮かべた。
何かが、動き始めているのを、俺は知らなかった。

不穏な動き（後書き）

＊次回予告

夢の中で知った言葉。『略奪者（テレン）』。その言葉の本当の意味を知った時、何かが壊れてしまうと、思った…

次回『略奪者（テレン）』

略奪者（テレン）

夢を・・・夢を見たんだ。何にもない真っ暗闇の中で、手探りで歩いていると遠くから、誰かの泣き声が聞こえてくる。その子は、羅刹くらいの少女で、顔は伏せっていて分からない。その子に「どうしたの？」と尋ねると、その子は「いたい…、いたいよぉ…」と呟く。そして女の子のお腹を見ると、薄っすらと血が滲んでいた。

「怪我してるのか！？早く手当てしないと！！」

と、俺が女の子をこっちに向かせようとした。すると、女の子はジタバタとそれを拒んだ。

「いや！はなちて！！」

そして、暴れていた足が俺の顎にヒットする。

「いっ！暴れるな！！」

「ヒッ！？」

俺の怒声で、女の子は暴れるのをやめた。そして、そっと顔を覗きこんだ。

その顔は、少し幼いが、これは、　羅刹だ。

「ね。汚いでしょ？これが、略奪者（テレン）の顔よ」

「てれん…？」

＊＊＊　現実　＊＊＊

「ちょっと！起きなさい！！」

俺、いや僕の上から降ってきたのは、朝お決まりの母の怒声。毎朝こうして怒声を浴びせられ、しまいには布団を剥ぎ取られる。そのため、寝起きは最高に悪い。ま、早起きすればいいことなのだが

…。

「遅刻するわよ！？」

「はいはーい。あ、そうそう。今日も部活で遅くなるから」

「そ。夜遊びも大概にね」

夜遊びじゃねーよ。

この頃、逆東京（あっち）に顔出すようにしているため、どうしても帰宅時間が遅くなる。桑田さんに頼んで、来る時より一時間時間を戻して向こうに帰れる別ルートの「特急列車」に乗って帰ってきている。ただ、あの特急はスピードが速くて、安全というわけではないため、正直毎度酔いそうになる。そのおかげで、ジェットコースターへの耐性がついたよ。

「いってきまーす」

毎朝母が焼いているクロワッサンを口の中に詰め込むと、自転車に乗って学校に向かう。その姿を見送る母は、ちょっと心配そうに言う。

「あの子、この頃男らしくはなったけど、翼が行方不明になってから、早半年。ま、手紙は来てるから死んではいないんだけどね…。どこほっつき歩いてるんだか」

そう。高橋家から「高橋翼」の記憶は消えていない。僕が、消すなと言ったんだ。もちろん、手紙は僕が書いている。塵となってしまった兄、死んだと告げたら母は真っ先に会いたいと言い出すに違いない。だが、兄といた数年の記憶が、その存在が両親から消えてしまうと思うと、なんだか兄が可哀想だった。誰にも思い出されることがないなんて、悲しすぎる。死んでしまった兄にしてやれることは、僕にはこれくらいしかないため、両親の記憶だけは抜き取られることはなかった。しかし、兄の通っていた学校の名簿からは抹消された。名簿というのは、記録されるからである。

「はぁ…。目疲れかな。最近、煉獄眼（ディスホールド）の方の視界がぼやける」

「アンタは無闇やたらに使いすぎ。今度剣術でも教えてあげるわ」
「ふぁ〜い」
この黒髪の少女は、歪羅刹。僕の同級生で、あっちの世界では魔女と呼ばれる存在。魔女のことはよく分からないが、魔王の次に偉いらしく、数は少ないほうらしい。僕が今のところ知っているのは、羅刹と羅刹のお姉さん・歪蘭玉（ひずみらんぎょく）さんくらいだ。この羅刹は、見た目は小奇麗な美少女だが、クールで性格はキツめ。そして、桑田さん情報では、羅刹たち魔女は不老長寿のため、羅刹の実年齢は１００を超えているらしい。そうしたら、お姉さんの方は一体いくつなんだ、という疑問が上がってくる。しかし、女性に年齢を聞くのは失礼なので、この疑問は心の奥底に置いておくとしよう。
「何眉間に皺寄せてるのよ」
「いや。そういえば、羅刹はさ〝てれん〟てなんだか知ってる？」
「っ――――！？」
この一言で、羅刹の顔色は一変した。そして、顔を背け一言「知らない」と言ってスタスタと行ってしまった。失言だったかもしれない。しかし、気になるものは気になってしまう。それを知るまでは。だが、この言葉の意味を知るとき、僕は羅刹との絆に自らヒビを入れてしまうことになる。そんなことは、今の僕には知るよしもなかった。

＊＊　同時刻　＊＊

逆世界・逆茨城
罪罰牢獄（エデン）　Ｎｏ．４４４４
「出なさい。面会よ」
婦警が牢を開けると、目隠しをされ、手足に枷を付けられた女はゆっくりと歩き出した。そして、防弾ガラスの前の椅子に座り、目隠しを外される。ガラスごしに、座るのは、桑田宗助本人だった。

「やぁ。3年ぶりだね、樋口乃輪（ひぐちのわ）クン」

略奪者（テレン）（後書き）

＊予告
略奪者。それは、力欲しさのあまり、魔人や魔女を喰って力を取り込んだ大罪人。はっきり言うと、それは欲望に飲まれた魔女の成れの果て。

次回『４４４４の女』

４４４４の女

罪罰牢獄（エデン）。そこは、大罪を犯してもなお、こうして生かされている者たちの独房。その中でもＮｏに４がつく者は極悪人。生きることも、死ぬ事も許されない者である。そして、彼女のナンバーは４４４４．

「やぁ。３年ぶりだね、樋口乃輪（ひぐちのわ）クン」
「…慣れ慣れしいのよ。ソースケ」
「ハハハ。酷いなァ。僕達元夫婦じゃないか。乃輪クン…いや。《本当の歪羅刹》」
「……。知っていて本当の乃輪を野放しにしたのか？」
「アハハハ。そーだよ。だって、あらかた、間違ってはいないだろ？」
「………すべて知っていたのか」

すべての発端は、今から４年前

＊＊＊　回想　＊＊＊

当時、護柱（ナイツ）は幼い歪羅刹と、桑田、乃輪、そして内海妖の父・内海啓祐（うつみけいすけ）の四人しかいなかった。そして、護柱を支援してくださっていたのは、当時健在だった羅刹と蘭玉の母・蘭星（らんせい）だった。羅刹はこの時まだ魔力を持っていなかった。そのため、御堂ツバサに貰ったカッターナイフをいつも肌身離さず持っていた。
「……」
「……」
「……」

「…何してんの？」

沈黙した桑田の店。当時はしがないアンティークショップであった。睨み合う三人の大人たち。

「あ、お帰り、羅刹ちゃん」

「……、ババ抜き？」

「「「そ！」」」

「…暇人共め」

こんな感じで、当時の護柱(ナイツ)はかなり暇であった。この時は神霊の活動も活発ではなかったため、任務は殆どなかった。羅刹は早く魔力が欲しいと、毎日ぼやいていた。母・蘭星(らんせい)や姉・蘭玉に憧れ、二人のようになりたいと、勉強をしていた。

「羅刹ちゃん。また髪の毛ぐしゃぐしゃよ？ほら、結ってあげる」

「ぇ…？」

一抜けした乃輪が読書中の羅刹の後ろに立ち、櫛で羅刹の綺麗な髪を優しく梳かし始めた。羅刹は気恥ずかしそうに頬を赤らめ、それを隠すように本で顔を隠した。乃輪はそれに一言、可愛いと呟き、作業に戻った。

「……はい。完成」

「ポニーテール？」

「そ。本読む時に髪の毛邪魔そうだったから。折角綺麗な髪してるんだもん。切ったら勿体無いわ。またいつでも、アタシが結って上げるわ」

「…ぅん」

「フフ。羅刹ちゃんは可愛いわね。さ、もう晩(おそ)いから帰りなさい。送ろうか？」

「ううん。一人で帰れる。…また明日」

「うん。また明日ね」

羅刹は本をカバンに詰め込むと、桑田のアンティークショップを去っていった。

＊＊　その晩　＊＊

「ぎゃあああ！！！！」

「ひぃ！？た、助け――――――！？」

ゴポゴポと飲まれていく魔人と魔女たち。血が地面と飲み込んだ者に降りかかる。やがて、そこにいた者は飲み込んだ者以外姿を消した。

「…これで、私は魔女になれる」

女は黒髪を揺らし、その場を去っていく。

これが、ある悲劇の幕開けだった。旧・護柱（ナイツ）の追憶。それを知るのは、この世に三人となった今、それを知ることは出来ない。『高橋哲平』の顔と『御堂隆樹』の顔を持つ彼は、一体どちらを大切にし、どちらを選ぶのだろう？この物語を聞いてもなお、彼は魔人でいられるのだろうか？それは、誰にも分からない。

――――――――――悲劇が、僕らを襲う……

――――――――――

４４４４の女（後書き）

＊予告
求め過ぎた者。救いたいが故に犠牲になった者。最後に残るのは誰？少女と女はどんな結末を迎えるのか？少女が選んだ道。それは……

次回『犠牲の元で作られた結末（前編）』

犠牲のもとで作られた結末（前編）

死が僕らに纏わり付く。欲望のまま求め続けた者は、やがて本当に欲しかったものの存在を知る。

＊＊＊　回想・続　＊＊＊

四年前　＊逆国会議事堂

ここでは、今緊急大会議が行われようとしていた。現在起こっている『魔女、魔人消失事件』についてである。

大魔人の五人の中には、羅刹と蘭玉の母であり、偉大な魔女の一人“歪蘭星（ひずみらんせい）”もいた。そして、最後に現れたのは、ホログラムであるが、この逆世界を支配者・魔王“ダヴル”とその息子で蘭星の夫、羅刹の父・ジークフリードだった。

「では、会議を始めます。今現在勃発している『魔女、魔人消失事件』について。昨日で犠牲者が１０人を超えました。犯人は未だ不明。そして、犠牲者の特徴は、皆すべて魔力を吸い取られています」

「なんとっ。実行者は大罪人・略奪者（テレン）か！？」

略奪者。その言葉を聞いた途端、周りは一斉にザワついた。ただ、魔王とジークフリード、蘭星だけは冷静さを保っていた。蘭星の横には、１６歳の蘭玉と１０歳の羅刹がいた。

「静まれ！魔王陛下からお言葉があるぞ！」

議会長が皆を静まらせ、沈黙の下りた会議の間で、魔王は立ち上がりこう告げる。

「すべての魔人、魔女を使い、略奪者（テレン）を何としても捕まえるのだ！　だが、殺してはならぬ！！　よいな！？」

『は！』

　こうして、約六千万もの魔人と約十万の魔女が魔王の命令によって略奪者（テレン）捜索に動き出した。

　蘭星は蝶柄の十二単を引きずりながら立ち上がり、バッと扇子を広げた。

「それではお義父様、アナタ、私（わたくし）は失礼しますわ。来なさい、蘭玉、羅刹」

「はい」

「はい、母様」

　蘭星の後ろをついてく蘭玉と、蘭星と手を繋ぐ羅刹。どこからどう見ても、仲睦ましい親子にしか見えなかった。しかし、蘭星の夫・ジークフリードは違った。自分の子である羅刹にしか愛情を注がず、蘭星の元夫の子である蘭玉を軽蔑していた。そのことに気付いた蘭星は、蘭玉を庇い、今では蘭玉のために夫とは別居しているのである。もちろん、羅刹も薄々気付いている。

「母様。私は桑田のとこに行ってきます」

「うん。気をつけるのですよ？　いくら魔力がないからといって、いつ略奪者（テレン）に襲われるか分かりませんから」

「はい」

　羅刹には魔力がない。正確には、まだないだ。それが蘭星にとってこの事態の不幸中の幸いである。羅刹は大魔女・蘭星と、次期魔王候補のジークフリードとの間の子。もし魔力を持っていれば、略奪者はその巨大な力を必ず欲しがる。蘭星は一番それに恐れていたのだ。

＊＊　桑田の家　＊＊

今日は護柱の召集がかかっており、略奪者についての会議が行われる予定だ。今日は、いつも欠席の超気まぐれな内海啓祐の姉・内海イサナがいた。イサナは護柱の正式メンバーではないが、裏で仕事に協力してくれている人だ。

「やぁ、全員揃ったね」

「ソースケ！とっと始めようぜ」

「姉さん。態度悪いよ」

「啓祐君。イサナさんは今日機嫌悪いの。仕方ないよ」

イサナの機嫌が悪いのは、この前の略奪者事件で愛弟子を失ったからである。悲しみよりに怒りの方が一層強かった。

そして、二時間二十分にも及ぶ会議は終わり、先に帰ったのは羅刹だった。正確には、乃輪が帰した。夜になると危険だからと言って。そして、桑田の家に残った大人四人は少しの間会話し、夜中頃に解散した。

乃輪は夜道が人一倍苦手だったが、家路には街灯のない道が殆ど。桑田について来てもらおうとも考えたが、略奪者のうろつく夜道を自分より遥かに魔力の高い桑田に歩かせるわけにはいかないため、仕方なく一人で帰ることに。

「ひぃー。この道にも街灯つけるように今度ソースケに言おう；」

などと独り言を呟いていると、ピチョンッピチョンッ、と水の滴る音が暗い道に響いた。そして、乃輪が足を進めていくと、一本の街灯の灯りの下に倒れてる人間四人と座ってそれを見つめる子供が一人いた。目を凝らして見ると、そこにいたのは、帰ったはずの羅刹だった。

「！　羅刹！！」

「…？あなた、だぁれ？」

「………ぇ？」

「わたし、羅衣（らい）ってゆーの。あなたはぁ？」

　この子は一体何を言っているのだろう。この子は確かに羅刹。でも、羅衣って…？

「あのね、わたし、まじょになったの！　」

「え……」

　思いたくない。でも、この状況では思うしかない。まさか、略奪者というのは、羅刹！？

「じゃ、じゃあ。そこの人達は？」

「？どこにいるの？？」

　羅衣と名乗った羅刹は、辺りを見回す。この子は、目が見えてない。そう思った。羅衣は立ち上がり、声のする方へ手を伸ばし、乃輪に辿り着いた。

「ら、羅刹？」

「らせつ？　らせつはねぇ、ねむってるの」

「眠ってる？」

「そう。まりょくはほしーけど、ころしたくない！って。だから、しかたなくわたしが、でてきてあげたの」

　盲目の虚ろな瞳で乃輪を見つめ、笑っている。

「羅衣。羅刹を起こして」
「どーして？」
「羅刹とお話ししたいから」
「ん～～。いいよ」

羅衣が目を閉じると、次に開けた時瞳の瞳孔は戻っていた。
「?.乃輪」
「羅刹！あれは！？」
「！……、私じゃない…ッ、私のせいじゃない！！！」
「羅刹！」
羅刹は取り乱し、乃輪の自分を抱く手から逃れようともがいた。
「私がやったんじゃないもん！私は魔女になりたかっただけだもん！！そしたら、羅衣が“やってくれる”って！！」
「ねぇ、羅刹。羅衣って？」
「もう一人の私だよ。羅衣は私と違って、魔力を持ってるの。私のことを分かってくれる、私の姉なの！」
「ッ…。羅刹、服の汚れを取ってあげる。いい？蘭星様には、遊んでて遅くなったって言い訳して。アナタを逮捕なんてさせるものですかっ！」
乃輪は魔力を込め、羅刹の服に付いた血を落とし、帰らせた。そして、乃輪はその場を去った。四人の死体を残して。

ガシャンッ

翌日。テレビをつければ、やはり四人の死体が出たというニュースがやっていた。乃輪は気だるい体を起こし、新聞を取ろうと玄関のドアを開けた瞬間。

乃輪の前にクロスした槍が現れ、彼女の行く手を阻んだ。

「！？」

「護柱（ナイツ）の樋口乃輪（ひぐちのわ）！　略奪者（テレン）容疑の疑いで、拘束します！」

犠牲のもとで作られた結末（前編）（後書き）

＊予告
守りたかった。救ってあげたかった。ただ、それだけ。
あの子が助かるなら、私は略奪者の仮面を被ろう。
そして、最後に思いっきり抱き締めてあげる。さようなら・・・

次回『犠牲の元で作られた結末（後編）』

犠牲のもとで作られた結末（後編）

あの子は助かる。それならいい。宗助には最後まで迷惑かけちゃったな…。

「護柱（ナイツ）の樋口乃輪（ひぐちのわ）！略奪者（テレン）容疑の疑いで、拘束します！」

「！………あぁ」

今日早朝、樋口乃輪、審判者（ジャッジメント）の署に連行された。

そのことは、早くも桑田や護柱の全員の耳に入ってきた。

「なんてことだッ！まさか…っ乃輪が……──────！」

「…これはシャレになりませんよ、姉さん」

「フン。桑田、早まるなよ。まずは蘭星さんに任せな。必ず覆してくれる」

「ッ……」

怒りに震える桑田を冷静に説得するイサナ。しかし、もし本当に乃輪が略奪者（テレン）で、自分の愛弟子を殺したのかも、と思うだけでイサナもいつ冷静さを失うから分からない。それが心配で仕方ないのは、弟の啓祐だ。

そして、もう一人混乱している人物がいた。

羅刹だ。

「…行かなきゃ。行こうよ、桑田」

「………──────そうだね」

桑田は護柱（ナイツ）の全員を連れて、逆裁判所へ向かう。

＊＊＊　……　＊＊＊

略奪者（テレン）事件の裁判は早くも午後に執り行われることに。そこには、大魔人はもちろん魔王とその息子までもが出席していた。魔力を極限まで封じる特別な手錠をかけられ、乃輪が現れる。

「被告人、樋口乃輪。そなたの言い分を聞こう」
「……ッ」
乃輪は口を噤む。
――――どうしよう。今私が何を言っても信じてもらえない。結局は私が犯人になる。そしたら、絶対私は罪罰牢獄（エデン）行き。……いや、でも、…………、
乃輪は他者に気付かれないように、蘭星の横に座る羅刹を盗み見た。
――――………いや。それも…、悪くない――――
乃輪の後ろで無罪を主張してくれることを信じる桑田達。

「………　私が、略奪者（テレン）です」

場が凍りついた。　そして、立ち上がり乃輪に駆け寄ろうとする桑田。
「乃輪！乃輪ァ！！！嘘だと言え！！」
「……、　目を背（そむ）けるな。桑田宗助」
「！………の…、わ？」
「私が、皆を殺した」
混乱する桑田を殺意に満ちた瞳で、睨みつける。そして、瞳の奥で揺らぐ優しい眼差しに、桑田は気付かなかった。ただ、羅刹だけが気付いていた。
自分を庇った、のだと。

＊＊＊　……　＊＊＊

判決は、自由刑。　特別な魔封じの檻に死ぬまで縛られ続ける。

裁判所から罪罰牢獄（エデン）に連行される乃輪。　そんな彼女を引き止める声が響く。

「乃輪！！！」

「ら…せつ？」

短い足で走ってくる羅刹。そして、乃輪の前に立ちふさがる。

「？」

「羅刹様！危険です。お下がりください！！」

「最後に、抱き締めて、私の頭をいつも見たいに…ッ、撫でてよ！！」

「……　おいで」

乃輪はしゃがみ、手錠で広げられない両手を差し伸べた。すると、羅刹は目に涙を沢山溜めて飛びついてきた。その際、涙の雫がほろりと零れ落ちる。乃輪は右手で下から羅刹の頭を撫でた。

――――――　魂交換（ガルフィティア）　――――――

「！」

羅刹が乃輪の耳元で囁いた。その瞬間。乃輪の意識は異様な浮遊感に襲われ、気が付いたら自分の眼の前に、自分がいた。目の前にいた自分は、立ち上がると用意された車に乗り、走り去っていった。

暫く呆然と立ち尽くしていた乃輪は、自分が羅刹になっていることに気付いた。

「ぁ……――――ッ　あぁ…、　あぁぁぁぁぁッッッ！！！！！」

犠牲のもとで作られた結末（後編）（後書き）

＊予告

信じてた。　羅刹は羅刹だって。　でも、皆嘘だった。
桑田さんも、妖君も、羅刹も、皆…、大嫌いだ！

次回『少年はそれを、裏切りと言う』

少年はそれを、裏切りと言う

偽りの体、偽りの生活。嘘だらけの中で生きてきた私は、もう本当の自分が分からなくなってしまった。私の名前は・・・

＊＊＊　現在　＊＊＊

「君は、羅刹君だね」
「……。で？そんなこと聞いてどうする。私の代わりに、『向こうの羅刹』を逮捕するか？」
「…いや。きっと出来ない。君が一生を投げ出してまで守りたかったものを、私は壊せない。……また来るよ」
退却しようとした桑田。乃輪は小さく口を開き、言葉を紡いだ。
「夢の中で、眼帯をした男の子に会ったの」
その言葉に、桑田は去る足を止めた。
「夢の中で、怪我をした私を、介抱してくれて。“羅刹”って呼んでくれたの。…この姿になって、初めて呼ばれたの。　少し、昔が恋しくなったわ」
「………。　さようなら、樋口乃輪」
鉄の扉が、静かに閉じる。

＊＊＊　＊＊＊

桑田の家。
今日はまだ隆樹は来てなかった。羅刹が一人、せっせと掃除しているだけだった。すると、桑田の飼っている三毛猫のパル（名称の理由は不明）が、羅刹の足元に擦り寄ってきた。実は、この子は昔乃輪が捨てられているのを拾ってきた子猫で、この子は乃輪が分かっている。

　羅刹はパルを膝に乗せ、一息ついた。
「……。パル、私は誰なんだろうね」
　うにゃ～、と甘えた声で鳴くパルに問いかける羅刹。　とうの昔に、自分は自分を捨てて、羅刹の中に残された羅衣と共に、“歪羅刹”として生きてきた。なのに、不意に昔が恋しくなる。そして、酷い罪悪感に苛まれる。
　すると、扉の歪な音と共に桑田が帰還した。
「おかえり、桑田」
「…」
「帰ったなら、掃除手伝って。また隆樹に手伝わせる気？」
「…」
「？桑田？」
　いつまでもダンマリな桑田の態度に、流石の羅刹も首を傾げた。そして、桑田の薄い唇が動く。
「ただいま、乃輪」
「ッ――――――！！？」
　羅刹と呼ばれるはずなのに、自分は今羅刹のはずなのに。
「…　は？何言ってんの？私は、歪羅刹よ。乃輪は、罪罰牢獄（エデン）に収容されてるじゃない。何？頭おかしくなった？」
「…もう隠す必要はない。僕は知ってるからね、君たちが入れ替わっていることを」
「……ッ、いつから？」
「二人の『扉』を開いた時だから、ツバサがここを追放された時かな。蘭星様もこのことを知ってる。最も、あの人の場合は最初から力の震えで気付いてたみたいだけど」
「そう…。あの方は、何か言ってた？」
「この事を僕が知った時、何故止めなかったのか聞いた。そしたら、あの人は――――――

；；；；

「蘭星様！何故羅刹の魂交換(ガルフィティア)を止めなかったのです？！」
「…止める必要はない。本当の略奪者(テレン)は、羅刹なのだから」
「！？」
「あの子は、自分で自分の罪を償いに行ったのです。最初から、ぁの子があぁすることは分かっていた。妾(わらわ)としても、無罪の者を牢獄に収容するのは、どうかと思う。これでいいのです」
「！アナタは自分の娘が可愛くないのですか！？」
「…。では、其方(そなた)は重罪人をこの世に野放しにするつもりか？」
「…それは…」
「略奪を行って(おこな)いた羅刹の中に眠る初代歪家当主であり、初代魔王“羅衣(らい)”を今は乃輪の魂が封じている。もし、羅刹が自分の体に戻れば次は略奪などでは済まない」
「…魔王陛下はご存知で？」
「あの人は…、まだ百年も生きてない幼稚な子供よ。まだ一人で魔王が勤まるとは思っていないわ」
「……そうですか」

；；；；

「そう。蘭星様はそんなことを…」
「…もう一度聞く。君は、確かに樋口乃輪(ひぐちのわ)なんだね？」
「…そう。私は羅刹じゃない。私は、桑田宗助の妻・樋口乃輪よ」

キィィィ…ッ

ドアが軋む音。そして、ドアの前に立ち尽くすのは、御堂隆樹。
「隆樹…」
「隆樹君…」
「ど、どういうことだよ…。羅刹が、羅刹じゃないって…ッ」

羅刹は眉をひそめる。この子だけには知られたくなかった…。
「なぁ！」
「隆樹君。君は関係ないだろ。これは、旧・護柱（ナイツ）の問題だ」
「関係なくなんかない！！俺だって護柱（ナイツ）のメンバーだ！！」
隆樹の眼から、涙が流れていた。羅刹はやはり、知らなければよかったと後悔した。
「俺が、俺が信じてた羅刹はどこにもいなかったんですね」
…お前が、何を、
「俺は、ずっと偽者の羅刹を信じてたんですね！」
…羅刹の何を、
「俺を騙してたんですね！！」
…何を、知って、、
「嫌いだッ。乃輪さんも、桑田さんも、羅刹も、皆みんな…っ嫌いだ！！！」

「アンタが羅刹の何を知ってるって言うのよ！！？」

羅刹の怒声が、桑田の家に響いた。怒りを孕んだ瞳と、怒声に隆樹は身を震わせた。
「アンタが今まで接してきたのは、私じゃない！アンタは、本物の羅刹のことを何も知らないくせに！あんたにそんなふうに言われる筋合いはないわ！！アンタが羅刹の何を知ってるって言うの！！！？」
「っ！」
「今の羅刹が嫌なら、護柱（ナイツ）をやめなさい。もう、ここに来ないで」
隆樹は、謝ることもせず桑田の家を飛び出して行った。そして、丁度桑田の家に行こうとしていた妖とすれ違うが、もはや彼の瞳には誰も映っていなかった。

「？桑田はん。何事ですか？」

「…妖君。君も知ってるよね。羅刹君のこと」
「はい。もちろん。…彼を追いましょか？」
「…お願いするよ」
妖は軽い足取りでUターンし、隆樹を追いかけるのだった。
そして、桑田の背後では泣き崩れた羅刹（乃輪）がいるのだった…。

少年はそれを、裏切りと言う（後書き）

＊予告
護柱を止める。その決心をしよとする俺を止めたのは、妖君と兄・ツバサの言葉だった。
俺は、どうすれば、どう羅刹に謝ればいいのか…、
次回『少年は迷い、答えを求める』

少年迷い、答えを求める

あの日から、僕の運命は変わった。乗り過ごした電車の中で出会った。長い黒髪と蒼色の瞳。僕は、あの時の君の姿に、見惚れたんだ。

だから、彼女だけでも、この世界では信じてみようと思った。

それなのに…、

＊＊＊　＊＊＊

『アナタが今まで接して来たのは羅刹じゃない！私よ！？』

「…」

『アナタが羅刹の何を知ってるっていうの！？』

「っ…　もう、何も分かんない」

隆樹は、どうしていいか分からないまま、とある公園のベンチに蹲っていた。眼帯からも零れる涙。不意に眼帯に触れ、グッと拳で軽く殴った。

「っ…！兄貴っ」

「なんや。シケた顔(ツラ)やなぁ」

聞き覚えのある声に、隆樹は振り返ってみる。そこには、煙管の紫煙を燻らせる渋い顔の内海妖が立っていた。

次の瞬間、妖の煙管が隆樹の間抜け面を小突いた。隆樹は少しの熱と痛さに、いってぇ、とワザと大げさに言った。
「君、何やっとるん？羅刹ちゃん泣かせたらあかんで？」
「うっ…」
「それとも、泣いてんのは隆樹君かな？」
その時、隆樹はある事に気付いた。

――――あれ？妖の口調が…。標準語？

ぽかん、としていると妖は随分と爽やかな笑みを向けて、次の瞬間には隆樹の隣に座っていた。
少しの間、二人には会話がなかった。しかし、これではいけない、と思ったのか隆樹は懸命に言葉を導き出そうとする。が、何を発せれば良いか分からない。金魚のようにパクパクと口を動かす隆樹の姿があまりにも間抜けだったため、観察していた妖は思わず噴出した。
「…クックッ」
「ム。笑わないでください！まったく、緊張感のない人ですね！」
「フッ、ごめん。だけど、少しは楽になった？」
「…あ」
やっぱり、変な人。
「…なんか、今日の妖はお兄さんっぽいですね。普段からそうしてればいいのに」
「そう？て、僕本当に君より上なんだけどなァ」
「……あの、妖…さん」
「ん？何」
少し改まった様子になった隆樹。
「妖さんや羅刹は、今まで普通に接してきたけど、一人一人何かを抱えてるようです。それを知らないで、ノンキに過ごしてきた俺は、ダメなんでしょうか？」

「…そんな事はない。確かに、僕たちはそれぞれに重い物を抱えているけど、そんなのその人が解決すべき問題だ。それに…」
妖は続ける。
「隆樹君が今まで一生懸命、羅刹を守ってきたことは、守ろうと誓ったことは、全部嘘なのかな？」
「っそんなこと！」
「ないよね？じゃあ、いいじゃないか。それでも、君が決意出来ないというなら、もう一度“彼”の言葉を聞けば良い」
「“彼”…？」
妖が取り出したのは、六芒星の彫られた手鏡。
「見るがいいさ。君が、約束してきた人を」
隆樹の意識は、深い闇の中に沈んできた。

＊＊＊　＊＊＊

沈んだ意識の中で、俺の頭を優しく撫でるぬくもりを感じた。見覚えがある。なんだか、とっても懐かしい……
「いつまで寝てるつもりだ？哲平」
「…？　兄貴？」
うっすら目を開ければ、視界には確かに兄貴がいた。しかし、うまく頭が働かない。驚こうにも体が動かない。そんな俺に、兄貴は優しく微笑んで、ワシャワシャと頭を撫でた。
「妖だね。哲平をここに連れてきたのは」
「…鏡」
「あぁ…、あの鏡か。あれにまだ俺の思念が残っていたんだな。まったく、無茶をする。無意識とはいえ、この空間に煉獄眼（ディスホールド）で穴を開けるなんて」
「…？」

覚えないことを言われて、隆樹は何のことかと記憶を探る。どうやら、自分は意識を失っているうちに兄の言っていることを行ったらしい。体が動かないのは、そのせいなのだろうか？
「妖が俺を頼るってことは、よっぽどのことがあったんだな。どうしたんだ？」
「…羅刹が、」
「…羅刹絡みか。うん、彼女の抱える問題は少々厄介だからな。でも、見込み違いだったかな」
「？」
そう言って、兄は悲しそうな顔をした。
「お前なら、羅刹の過去関係なく彼女を俺の分まで守ってくれると思ったんだけどな…」
言わなきゃ…。違うって…
「やっぱり、お前には重荷だったかな…」
違う…、違うよ、兄貴
「もうお前は、普通の生活に戻れ」
いっ…

「嫌だ！！」

その言葉を発したと同時に、急に体が軽くなり隆樹の体は自然と勢いに任せて上半身が起き上がった。
「あ…、あれ？」
「おはよう、哲平」
「…兄貴」
「お前は、自分に巻きついてた束縛を解いたんだ。最初っから答えは決まっていたんだろ？羅刹がどんな過去を持っていようと、俺は羅刹の傍を離れないって」
「…うん。俺は、兄貴との“約束”として羅刹の傍にいたつもりだった。…でも」

「今は違う。俺は、俺の意思で羅刹を守りたいって、思うんだ。中身（たましい）が違うとか、関係なかったよ。だって、俺の知ってる羅刹は今の羅刹だから」
　すると、兄貴の体が薄れて最後に隆樹の頭を撫でて、ふっと風に消えていった。
「…兄貴。　またな」

＊＊＊＊　＊＊＊＊

　次に目を覚ませば、今度こそ現実。ベンチで寝ている俺と、肩を貸してくれている妖。妖は、ずっとここで煙管を吸いながら待っていてくれたのだ。
「…妖？」
「ん？起きたか。ほな、行くで。桑田さんから連絡あったさかい、もう帰らんと現世の親御さん心配するで？」
「……うん。いろいろありがとう、妖」
　俺は、現世（むこう）に帰る前にしっかり羅刹に謝ろう、と考えながら妖とその場所を去った。

少年迷い、答えを求める（後書き）

＊予告

逆東京に平和が戻りました。しかし、その陰で妖はあることに悩んでいた。そして、また幕が上がる。

『エピローグ』

エピローグ

「きっと、この後も言い争うこともあるだろう。それでも、俺は、君の傍にいたい」

俺が彼女に告げたその言葉一つで、俺等の争いは収まった。今まで苦しんできた分、これからは共にその苦しみを分かち合って生きていくから。だから……、

＊＊＊　＊＊＊

逆大阪・とある茶屋

～♪　～♪

上機嫌に鼻歌を奏でながら、団子を食べる一人の女性。その両手には新聞。

「…ん？大魔人のじじぃが危篤？……嫌な予感がするわ。久し振りに、逆東京に帰ろうかしら」

女は竹串を口に咥えたまま、茶屋を去っていった。そして、会計の際に領収書をお願いした。女将さんが、お名前の方は？と聞くと、女は少し考えて。

「んじゃ、“内海イサナ”で！」

＊＊＊　＊＊＊

翌日。妖は、腰を痛めた祖父の代わりに店番をしていた。その際、首から落ちた勾玉のペンダントを大事そうに見つめた。そして、呟いた。

「怪…　」

そして、また幕が上がろうしていた。

エピローグ（後書き）

Yの章、終了

プロローグ

雪が降る。

雪が積もる。

雪が…溶ける。

この時期は、毎年思い出すんや。怪のことを…。

最後にアイツからもろたのは、この首飾りやったなぁ…。

「これ、アタシとお揃いなの！大事にしてね。これがある限り、アタシと妖兄ちゃんは、ずっと一緒よ」

いっつも自分の跡追い回しとった。んで、二言目には「兄ちゃん」、「兄ちゃん」。思い出すだけでウザイわ。

でもまぁ、正直ホンマはめっちゃ幸せやったんやろな。

せや、お袋がこないな口癖言っとったな。

「大事なモンはなぁ、失ってから初めてその重みに気付くもんや。

せやから、妖も怪も、自分の大事なモン一生懸命守るんやで？」

もう失ったわ。手ェから滑り落ちた瞬間が、一番(いっちゃん)痛いんや。手ェ伸ばしても、もう届かんのや。

せやから、もう伸ばすんはやめたわ。

最後にするで、　怪。

＊＊＊　＊＊＊

雪が降る。
雪が積もる。
雪が…溶ける。

「…妖、兄ちゃん―――ッ！」

――――――――――――ドックン…！―
―――――――――――――

プロローグ（後書き）

＊予告

過去の記憶。因縁の名前。冷たい青年の殺意は、誰に向けられたものか。

次回『氷帝の魔人』

ここは、逆東京都の北側のとある路地に建つ店。名を『魔薬専門店蘭瑛(らんえい)』という。代々魔人一族の内海家が営んできた薬屋。現在店主を勤める内海瞬英(うつみしゅんえい)は、あの魔王に一目置かれるほどの天才魔薬師である。

そして、今店番をしているのは、彼の孫で桑田の護柱(ナイツ)の一人である狐目こと、内海妖(うつみよう)だった。お気に入りの煙管(キセル)を吹かして、店内を煙で充満させていた。紫煙の充満した店のドアベルを鳴らして来店してきたのは、なんと同じ護柱の御堂隆樹(みどうたかき)だった。タバコの臭いが大の苦手で、滅多にやって来ないため、妖は一瞬目を疑った。

「いらっしゃい。珍しなァ、あんさんが来よるなんて。今日は何ぞ用でっか？」

「あ～。二日酔いに効く薬なんて…あります？」

「は？」

……まさか、この魔薬で有名に店に二日酔いの薬求めてくるとは…。

さすがの妖も少し驚いた。隆樹は、言うんじゃなかった！　という顔で俯いている。

「…え…っと、すみません。ない…ですよね？」

「おますよ」

「……へ？」

「ウチは薬ゆうもんなら、なんでも取り扱ってるさかい、ちゃあんとあるで。どんなんがえぇんや？」

「えっと…。一番効きそうなヤツで」

「一番(いっちゃん)効きそーなヤツでっか…。んー」

妖はカウンターの向こう側の棚を捜し始め、いろいろと埃を被った薬たちを奥の方から引っ張り出していく。…大丈夫か？

「お！あったでェ。これや、これ！」

「…液キャベ」
「せや！二日酔いゆうたらこれや！…にしても、二日酔いゆうのは桑田はんか？」
「うん。同じ管理者さんたちに飲みに誘われて、飲んだそうです。お酒弱いのに」
「そりゃ、大変やったなァ」
「はい。で、いくらですか？」
「ん〜。ま、千円」
「え、高？！」
　と言いつつも、サイフから千円札を出す。そして、小瓶の液キャベを受け取ると店を出て行った。
　妖はいつもの笑顔で手を振る。やがて、隆樹の姿が見えなくなると、一服して背後に視線を向ける。
「ごきげんさん、姐はん」
　すると、障子の向こうから、一人の女性が現れた。
「はっ、気付いてたか。完全に気配消してたと思ってたのによォ」
「伊達に何年も護柱（ナイツ）やってへんわ」
　妖の後ろにいるのは、元・護柱（ナイツ）の（仮）メンバーで妖の伯母・内海イサナだった。今は仕事のせいであちこち放浪している。そのため、いつもどこにいるか分からない。
「今日はアンタに面白い情報持ってきたよ」
「…いらんわ。どーせ金取んのやろ？」
「そーねェ…、妖のおいしいご飯が食べたいな〜」
「なんや。そんなんでえぇんか？」
「フフ。妖は義妹（いもうと）より料理うまいからな」
「お袋は主婦向きちゃう人やったからな。で、情報ゆうんは？」
　妖は、煙管の灰を捨てると、店のドアに「清掃中」という看板をかけて座りなおした。
　イサナはまず、店の奥の座敷にあった新聞を取り、一面の見出しを見せた。

「新聞読まないアンタでも、これは見たでしょ？」
「…大魔人が一人死んだっちゅー話やろ？」
「えぇ。で、この次の大魔人が、内海怪。アンタの妹なのよ」
内海怪。元・護柱メンバーだった内海啓祐とその妻・和香との子で、イサナの姪、妖の実の妹である。訳あって、政府に保護されていたのだった。
「ま、そーなるんやろな。大魔人候補は、怪と姐はんの二人しかおらんさかい」
「アタシは大魔人なんてメンドーなものやんないわよ。そしたら、必然的にあの子になるんだよなァ」
「……」
今日は珍しく妖の眉間に皺が寄っていた。その様子にイサナは溜め息をつくしかなかった。
そこへ腰を叩いて杖をつく老人が店の奥の階段から下りてきた。
「おじん、もう腰痛はえぇんか？」
「フン。イサナも来てたか。どーせ、怪のことでも話してたんだろ」
「…」
「ひゅ～♪親父、暫く見ないうちに地獄耳になったんじゃねーか？」
「そんなんじゃないわい！」
この老人は聞いた通り、イサナの父で妖の祖父の天才魔薬師・内海舜英である。この前までは風邪、そして今回は腰痛で店を妖に任せていたこの店の店主。
「それより、妖。お前さんに電話じゃ」
「僕に？」
店の黒電話ではなく、家の電話かららしい。いつもは、店の電話が基本なのに、と妖は首を傾げた。そして、本体の横に外された受話器を耳元へと導く。
「はい、変わりましたで」
『あぁ。久し振りだね、妖クン』
その声の主は、逆東京都管理者の桑田宗助だった。

「あぁ、お久し振りですぅ。桑田はん」
『元気でやってるかい？こっちは今日も掃除をやらされてるよ』
受話器の向こうから、桑田の声に混ざって確かに羅刹の怒鳴り声も聞こえた。妖は思わず苦笑した。
「ほんで、二日酔いのほうはどや？」
『おかげで、いつもの調子が戻ってきたよ。……妖クン、君に仕事を頼みたい』
「なんや？」
桑田は少し間を入れて、本題に移った。
『大魔人が一人死んだことは知ってるね？その後、評議会と元老院の決定で、一週間後正式に新たな大魔人として“内海怪”が加わることになった。で、妖クンには大魔人候補の内海怪を一週間警護してもらいたい。いいかい？』
「……わざわざ僕に頼まんでも、羅刹チャンがおるやろ？」
妖の回答は嫌そうではなかったが、あまり乗り気でもなさそうだった。妖は気を紛らわそうと、電話の横にあったボールペンを回して手遊びを始めた。
『はぁ…。妖クン、もし彼等が噂を聞いて動いていると、知っても断るかい？』
「ッ！」
妖のペンを回す指が止まった。“彼等”という言葉を聞いて。そして、口元に笑みを浮かべ、ペンを手の中で真っ二つに折った。
「へぇ…。来るんか？奴等」
『あぁ。逆京都から連絡が来た。間違いない』
「…フ。えぇよ。引き受けたるわ、その仕事」
『そう言ってくれて助かるよ』
妖の脳内を横切るのは、自分の胸を貫いたあの氷の感覚と、怪の泣き顔。それを思うたびに、妖の怒りはすさまじく増していくのだった…。

―――――――――ついに来たで、この時が
――――――――――

氷帝の魔人（後書き）

＊予告

私はずっと前からここにいる。昔、兄と私にあった出来事。その時の傷は未だ癒えず、この胸の中に残っている。

いつになったら、私たちは……。

次回『過去の傷、その名は「莅豹（リヒョウ）」』

過去の傷、その名は「莅豹（りひょう）」

希望は、ずっと前に捨てた。神によって取り上げられた、私の自由（つばさ）。もう二度と私は飛べない。

でも、何年経っても捨てられないものが、一つだけある。これを捨てたら、私はもう人間ではない。

＊＊＊　＊＊＊

逆東京都　とある豪邸

ベッドから起き上がり、大きな窓辺に近づく一人の少女。栗色の髪を一束に三つ編みにする少女の水色の瞳は真っ直ぐに空を見つめ、どこか悲しく揺れていた。

そこへエプロン姿の使用人の女性がノックして入ってきて、錠剤の薬と水をテーブルに置いた。

「石榴（ざくろ）様、お薬をお持ち致しました」

「綾子（あやこ）。2人だけの時は、二つ名ではなく本名でお呼びなさい」

「…はい、怪様」

この少女の名は、内海怪。一週間後、大魔人に就任する少女である。

二つ名とは、大魔人と四天王が本名を悟られぬように、昇格すると共に貰う名である。名前は、その人物に相応しい花言葉を持つ花の名が与えられる。ちなみに、大魔女でもあり四天王でもある歪蘭玉（ひずみらんぎょく）は、“桔梗”の二つ名を持つ。

怪はこの名が嫌いである。石榴の花言葉は“優美”と“愚かしさ”。こんなにも醜い自分のどこが上品で美しいことか。怪は所詮、上の四天王にとって愛らしい飾り物でしかない。何の害もないと思って、自分を次の大魔人に選んだのだ。それが、悔しくて仕方なか

った。
　ぐっと下唇を噛み締めていると、暗い部屋のカーテンが開き、光りが部屋を満たした。
「さぁ、今日はとても良い日ですよ！」
「？」
「今日は、怪様の護衛に逆東京の護柱（ナイツ）の内海妖（うつみよう）様がいらっしゃるのですから」
「？！妖お兄様が？」
　綾子の吉報により、怪に曇った表情は一変して、太陽のように輝いた。

　一方、内海宅“魔薬専門店　蘭瑛”では
　腰痛の治った店主の内海舜英（うつみしゅんえい）が店番をしていた。そして、遅めにイサナが起床してきた。
「ふぁ～…あ？妖はどーした？」
「もうとっくに出掛けたわい。もう日はてっぺん昇ってんだよ！」
「アハハハ。ちょっと寝過ごしたぜ。……妖、怪の護衛に行ったんだろ？仕事で」
「…あぁ、仕事だ」
　舜英は静かに言う。　そして、イサナはバツが悪そうに部屋の奥へ引っ込んでいった。

＊＊＊　＊＊＊

　車で怪のいる豪邸へ向かう妖。その心は静けさを保っていた。し

かし、闘争心は見え隠れし、その証拠に両手には既に武装が施されていた。

そして、そろそろ到着と聞きつけ、怪はずっと窓の外を見つめていた。すると、門が開き車が一台入ってきた。

「綾子！妖お兄様がいらしたわ！」

「石榴様、帯がまだ結べておりません！動かないでくださいな！！」

バタバタとする2人を他の使用人たちは微笑ましいことこの上なく微笑んでいた。

車から降りた妖のもとに着物を着こなした怪がやってきた。

「兄様！」

妖へ満面の笑顔を向けた怪の姿を目の前にした妖は無言で跪いた。

（――――――――――え？）

「本日より石榴様の護衛を任命された逆東京都　護柱（ナイツ）の内海妖です。石榴様のお命、全力でお守り致します」

怪が失望した。　１３年という年月が2人の関係を崩してしまったのだと。

怪は涙を堪え、なんとか声を絞り出した。

「あ…あぁ。任せた、護柱の内海妖」

「お任せください」

怪は背を向け、ぐっと下唇を噛み締めた。

「っ…。私は疲れた、部屋で休む」

そう言って、怪は逃げるように部屋へ戻って行ってしまった。その後ろ姿を無言で見つめる妖の薄荷色の瞳の奥は微かに揺らいでいた。

部屋の鍵をかけ、ベッドに身を投げた怪は、これほどまでにない悲痛な泣き声を上げた。

心配になった侍女の綾子はドアの前で必死に呼びかけていた。
「石榴様！…っ怪様！」
「っ来るな！！一人にして」

楽しみにして、浮かれていたのは自分だけだった。妖は…兄は仕事のために来たんだ。仕事の時、標準語になるのが、その証拠。妖は、仕事の時と本気で怒っている時だけ標準語になる癖がある。
もう、前の関係には戻れないのだろうか…。

「……怪様。落ち着かれましたら、庭園に妖様と行かれてみてください。怪様のお育てになられた薔薇がやっと咲いたんです」
「……えぇ」
怪はそっと目を閉じる。

＊＊＊　……　＊＊＊

桑田宅
羅刹はいつも通り、桑田家の掃除。隆樹は学校で少し送れるとのこと。そして、桑田宗助は真面目に新聞など読んでいる。
新聞に集中していた桑田の意識が、突然削がれた。
「？どうしたの」
「…逆長野の管理者から、伝達が来た」
「ふーん。管理者同士のテレパシーみたいなやつ？」
「あぁ。…“中国地方（近畿地方）との境界に張っていた結界が何者かの手によって破られた。綻びが生じたのは、逆愛知”とのことだ」
　その知らせを聞いて、羅刹は思わず掃除機を手から落とした。
「どういうこと！？門(ゲート)の目を欺いてこの中部（関東）に入り込んだっていうの！？何者よ？」
「……妖クンに連絡した方がいいかも。奴等が来たって」

「奴等…？」
「そう。昔、　妖クンを殺した奴等だ」

＊＊＊　中庭　＊＊＊

「ねぇ、庭へ散歩に行きたいの。ついて来て」
妖は怪の突然の申し出に、少々驚いたが素直に引き受ける。
赤、白、黄、中には青なんてものもある色とりどりの薔薇。庭いっぱいに咲くこの薔薇は、ここでの孤独を紛らわせるために怪が大切に大切に育てた特別なものであった。
「ここには、警備がまったくないの。ここで戦闘が起こったら、花たちが潰されてしまうもの。その代わり、ここには逆長野の管理者と評議会会長が張ってくれた強力な結界があるから安全なの」
「……警備がない。では、人目もつかんちゅーことやな？」

「……――――――え？」
妖の言葉遣いが変わり、振り返ろうとした怪の体は妖の両腕によって抱き締められた。
「あ～。やっと怪に触れられたわァ」
「よ、妖？」
状況が飲み込めず、あたふたした怪が妖のことを名前で呼ぶと、妖は少し寂しそうな顔をした。
「前みたいに“兄ちゃん”呼んでくれへんのか？」
「あ…　兄さ…ん？」
「そや。本当に大きゅうなったなァ」
「く、苦しいよぉ…、にっ兄さん…ッ！」
「ん？何泣いとんや？」
怪は何故か不思議と涙が溢れて止まらなかった。
「しゃーないな。ほれ、好きなだけ泣いたらえぇよ」
怪は嬉しくて涙が零れた。妖の許可をもらい、怪は思う存分泣い

た。

　数分、泣き続けて疲れた怪はベンチに座り、妖の肩に凭れ掛かった。

「……ねぇ、兄さん。私ね、本当は大魔人になんかなりたくないの。ずっと、ずっと兄さんやおじいちゃんと一緒にあの家で暮らしたい。こんな能力（ちから）、望んで手に入れたわけじゃないのに…」

「…せやな。僕も怪がずっと傍に居（お）うてくれるなら、他はなーんもいらんわ。たとえ、僕と怪だけの世界になったとしてもや」

「兄さん。あのね、私、ずっと…兄さんのことが――――」

　　　ゾワ…ッ

　怪が妖に言いかけた瞬間、２人の周りに背筋が凍るほどの冷気が漂い始めた。

「！兄さんっ！？」

「っ……」

　妖からはただならぬ殺気と噴くような汗が額を流れていた。

「兄さ…ん？」

「…奴や、奴の気や！」

　妖はぐっと胸部を抑え、まるで走馬灯のように、“あの時”のことが頭の中を駆け巡っていた。

　そして、屋敷の外に黒服の男と同じく黒に身を包んだワンピースの女性と左頬に刀傷のある男が現れる。２人を見つめるように立ち止まり、屋敷を囲む鉄格子に触れる。

「……ふっ。管理者の結界か」

「！？」

　男が鉄格子の間の空に手を触れると、空気が揺れた。そして、空気が泡となって散った。それは、逆長野の管理者と評議会会長が張

った強力な結界だった。
「なっ、なんで…！？」
「っ…！会いたかったで、孤陰（こかげ）ェ！！」
「え…」
「フッ。１３年ぶりか、内海妖」
フードを外し、現れた右目に火傷の痕のある男の顔を見た瞬間、妖の眠っていたドス黒い「怒り」という感情が滾り始めた。
「久しいな、内海怪。我を覚えてるか？１３年前、お前達の父と母を殺めたこの“莅豹（りひょう）”のリーダー・孤陰を！！」
――――――――我は再び、そなたを奪いに来たぞ！！――――――――

過去の傷、その名は「莅豹（りひょう）」（後書き）

＊次回予告

１３年前、私たちは何かを失った。最後に残ったのは、妹（わたし）と兄（あなた）だけ。だから、私は、あなたのために。

１３年前、僕たちはすべてを失った。残ったのは、兄（ぼく）と妹（きみ）だけ。だから、僕は、君のために。

次回『兄は妹のために、妹は兄のために』

兄は妹のために、妹は兄のために

１３年前、私は５歳で兄さんは９歳だった。護柱(ナイツ)として任務に向かった両親の帰りが遅いと、様子を見に行った妖。それを慌てて追いかけた私。そして、兄が見たのは、まさにあの男が父にトドメを刺す寸前だった。

「父さんッ！！」

冷たい氷が父の体を貫いた。

溢れる血の臭い。肉からズルリと刃が抜かれる時の嫌な音。

あと少し… あと少し、着くのが早ければ。あと少し… あと少し、叫ぶのが早ければ…

両親は死ナナカッタノニ…

＊＊＊　現在　＊＊＊

庭園に立ち込める冷気。戦闘が始まってから約１０分ほど。そこには、傷だらけの妖と無傷の孤陰。そして、それを心配そうに見つめる怪と、勝利を確信し微笑む孤陰の部下。

一滴一滴ずつ流れる妖の血。そこには涙も混ざっていた。

「くっ、はぁ…ッ！負け…へんで！！」

「フン。しぶとい。しかし、１３年前から何一つ成長していないな」

「ッ何やて！？」

「そうだろ？結局、お前は今も昔も妹を守れぬまま、無力に地べたを這っているではないか」

その言葉に、妖は衝撃を受けた。拳を握り締めて唇を噛み切った。妖の中で渦巻いたのは、己の無力さに対しての怒りと、ドロドロと

した屈辱感。そして、過去と今への後悔。　また、守れないのか、と自らに問う。
孤陰は手袋を纏った左手を氷で刃のように凍らせ、右手で妖の髪を掴み上げて、左手の切っ先を胸部に向ける。そして、そのまま妖に突き刺そうとする。
体が、強張る。また目の前で兄を失ってしまう。もう、『やり直し』は出来ない。
もう、出来ない…！
「ぁ…　や、やめてェ！！！」

≪炎技（えんぎ）　その12ノ章・黒炎弓（ベルフレイム・アロー）≫

突然、孤陰の頭上に黒い炎で形作られた弓矢が現れ、孤陰目掛けて落下してきた。
孤陰は咄嗟に妖を怪の方に放り投げ、矢を避けた。
「チッ。何奴！？」

「妖、一つ貸しだからね！」
「無事でよかった」
「全員、目を閉じてろよ！！」
そこにいたのは、羅刹と桑田、隆樹だった。妖は隆樹が左目のコンタクトレンズを外そうとしているのに気付き、最後の力を振り絞って、怪の眼を覆い抱きすくめた。
瞼の裏からでも微かに分かるほどの真っ赤な光。突然の光りに孤陰たちは動揺した。
「！？この光りは…」

「孤陰様！煉獄眼(ディスホールド)です。ここは退きましょう！」
「ぐっ！仕方ない、一旦退くぞ！」
孤陰たち３人は退却し、それを追おうとした羅刹を桑田が止めた。
隆樹もコンタクトを付け直し、ひと安心したのは、ほんの束の間。

「兄さんッ？！」

怪の腕の中で倒れている妖の体力は限界に近く、さらに高熱で気を失ってしまったのだった。

＊＊＊　……　＊＊＊

やがて、雨が降り出した。
妖の高熱は一向に下がらず、今は駆けつけた祖父の舜英が看病している。
怪とその他の皆は別室で待機していた。
「えっと…。で、桑田さん。俺、何の説明もなしに連れて来られたんですけど」
「あぁ、そうだったね」
「あの…。私から、皆様にお話しさせてはいただけませんでしょうか？」
「あ、怪クン…いや、石榴様。お願いします」
「…あれは、今から１３年前―――――」

＊＊＊　＊＊＊

今から１３年前。桑田率いる旧・護柱(ナイツ)が逆東京都を守っていた頃。

舜英の息子・啓祐（けいすけ）とその妻・和香（わか）、そして2人の子供、9歳の兄・妖と5歳の妹・怪。この5人で暮らしていた。舜英の妻であり2人の祖母・英奈（えな）には去年先立たれ、啓祐の姉・イサナは逆世界を放浪する身であった。

護柱の一人であった啓祐は、その日この逆東京に反政府派のグループが不法入県したという知らせを聞いて医療魔力を使う和香を連れて、出掛けて行った。

両親の帰りを待つ妖と、一人楽しそうに遊ぶ怪。すると、舜英の店番する店に桑田が息を切らして駆け込んできた。

「っ！何事じゃ！？」

「イ、イサナさんはッ！？大変なんですッ、啓祐さんが…！！」

その時、妖は桑田の言葉を聞いて、家を飛び出して行ってしまった。祖父の止める声も聞かずに。それを見た怪は、何か胸騒ぎを感じ、兄を追いかけた。

走っていた妖が最初に見つけたのは、父の足元に転がった母の死体。そして、その前に膝をつく父の姿。黒い服の男は父の首を掴み、右手に備えた氷の剣で父の胸部を一気に突いた。

「ッ！父さん――――ッ！！」

ズルリと抜かれた氷の剣は、父の血で染まり物凄い血の臭いを放っていた。妖は倒れた父に駆け寄り、体を揺する。

「父さん、父さんっ！」

「…ッ！にっ、にげろ…、　逃げ…ろっ、妖！！！」

妖の背後に迫っていた男は、妖の体を片手で持ち上げ、じっと見る。

「この男の息子か。……目撃者は、排除だ」

「ぐぁッ！！」

妖の首を強く掴み、締め付ける。そして、左腕を氷で凍結し、父のように胸部を貫こうとする。

と、その時。左腕に怪が飛びついた。

「やめてぇぇぇ!!!!」

この時のことを、怪は今でも後悔している。ちゃんと阻止していれば、妖は…。

————————————すべて、私のせいだ…ッ!

————————————

兄は妹のために、妹は兄のために（後書き）

＊次回予告
あの事件が、怪の人生を変えてしまった。全て、僕のせいや。あないなことをしなければ、怪の能力は知られることはなかったや…。
次回『蘇生の魔人』

全部、僕が悪いんや。僕の浅はかな行動で、怪は自由を奪われた。せやから、もう二度と失うわけにはいかへんのや。
もう、二度と…。

＊＊＊　過去　＊＊＊

妖は呼吸がうまく出来ず朦朧とする意識の中、目の前の男の背後の小さな影に気付いた。
怪だ。怯えた表情で妖と男を凝視していた。妖は気付かれないように掌に氷で〝逃げろ〟と形作り、薄く弱々しく微笑んだ。

「やっ、やめてぇぇぇ！！！」

しかし、怪は逃げなかった。逃げることなく、男の左腕に飛びついた。
「ぐっ！？離せ！！」
「きゃっ」
怪は振り落とされ、地に転がった。そして、ハッと振り返ると、顔に鮮血が飛び散った。
「ッ！？兄さんッ！！！」
「っ…か、い…」
地に落ちた妖を抱き締め、涙する怪。その怪までも始末しようと手を伸ばす男。しかし、

（バチッ）

「ッ！？」
怪の周りの空気が渦巻き、男の手には電流のような衝撃が走った。驚いた男は咄嗟に手を引っ込めた。
そして、光り出した怪の体。その光りは怪と妖を包み込み、花びらの形になると蕾のようになったのだった。

＊＊＊　＊＊＊

逆茨城　逆水戸
芦原邸宅

「…？」
「…どうかしました？慧翠。この歪蘭玉を目の前に余所見ですか」
「…フッ、君があまりに美し過ぎるから直視できないだけさ。愛してるよ、俺の桔梗」
そう言って蘭玉の顔を上に向かせ、口付けしようとする男の唇に、今度は蘭玉が人差し指を添えて制止した。
「軽々しく愛を口にしないで。悪いクセよ。気付いてるんでしょ？『禁忌の第四の力』を持つ者が覚醒した」

『禁忌の第四の力』。それは、“蘇生”“破壊”“呪詛”“時渡り”といった四つに関連する能力のこと。この能力は禁忌とされ、今まで四天王と呼ばれる元老院と評議会が保護してきた。

「…内海怪。5歳、女子。ずっと前から気付いてたさ。だが、普通に生きてれば覚醒はありえない　…はずだった」
「……行きましょう。お茶会は中止ね。仕事に行くわよ、慧翠」
「はいはい。今度は、一緒にアフタヌーンティーでもどうだい？蘭

玉」
「…喜んで」
評議会会長・芦原慧翠と大魔女・歪蘭玉が、逆東京へ向かう。

＊＊＊　＊＊＊

光の中で、怪は死体になって冷たい妖の名を必死に呼び続ける。
「ねぇ、妖。私、私ね。妖が好きなの。大好きなの。本当は、兄妹に生まれたくなかった…。　それぐらい、兄さんのこと、好きだよ」
「だから、死なないでよ。私を、独りにしないでよ……　死なないで！兄さん！！」

光の外では、男とその仲間は呆然と見つめていた。
「孤陰様！この能力は…もしや！」
「…っ！　捜したぞ！！」
「やっと、あの方を…」

やがて、光の蕾は花開き、中から妖を抱き締めた怪が現れた。
「…んっ」
と、その時。怪に抱かれて死んだはずの妖が、息を吹き返した。
怪は驚きや何故？という感情よりも先に、嬉しさがこみ上げた。
「兄さん！！」

「フフフ。見つけたぞ、蘇生の魔人よ！！」

「…ぇ？」
両手を広げ、高笑いする男。そして、興奮が収まると怪に手を差し出した。

「…？」
「来い、この私と。お前のその力が必要だ」
「……行かない」
「…拒めばその少年をもう一度殺し、無理やり連れてゆく。お前の力は、“その対象の人間を一度だけ蘇生する力”だ。次、その少年が死んだら、お前は今度こそ、兄を永久に失うぞ」
失う。その言葉に、怪は唾を飲む。ついさっきまで感じていた兄を失った悲しみがまた…。
そう思うと、恐ろしくてたまらなかった。
「……兄さん」
怪は妖をギュッと抱き締めた後、そっと妖を地に寝かせ、立ち上がる。
「フッ。良い判断だ」
静かに男へ歩み寄り、差し伸べられたその手をとろうとした、

その瞬間。

怪の背後で眩い閃光が光った。
「!？」
「くっ!？目くらましか!!」
煙の中から姿を現したのは、上着をはためかせる評議会会長の芦原慧翠（あしはらけいすい）と、大魔女の歪蘭玉（ひずみらんぎょく）だった。
「魔王に仇名すテロ組織・莅豹（りひょう）のリーダー・孤陰!」
――――――――――アナタの身柄を拘束します!!―――――――――

蘇生の魔人（後書き）

＊次回予告

この想いは、誰にも知られてはならない。相手に悟られてはならない。

この関係を維持するために、私は何も言わず、アナタから去っていく。でも、大丈夫。私とアナタは、対なるペンダントで、繋がっているから…

次回『愛しき人の言葉』

愛しき人の言葉

この想いを、形に出来るでしょうか？
言葉で伝えられないこの想い、アナタに…。

＊＊＊　過去　＊＊＊

「魔王に仇名すテロ組織・莅豹（りひょう）のリーダー・孤陰（こかげ）！！アナタの身柄を拘束します！！」

閃光と共に姿を現した大魔女にして四天王の一人・歪蘭玉（ひずみらんぎょく）と評議会の長・芦原慧翠（あしはらけいすい）。

「チッ。大魔女と芦原の若頭は厄介だ。退くぞ！！」
「「はっ」」
孤陰の吹雪によって、莅豹は姿を消した。怪は一気に腰が抜け、地に膝をついた。それを蘭玉が受け止めた。
「…っ。ありがとうございます。蘭玉様、芦原様」
「大事ないか？……兄の方も大丈夫そうね、よかった」
「即刻で悪いが、聞いてもらおう。内海怪（うつみかい）、レベル最高位・レベル1以上の魔人として、我々評議会が正式に保護することになった。一緒に来てもらおう」

「……え？」

「慧翠！」
「もう一度言おう。レベル1の魔力を持つ、“蘇生の魔人”内海怪。

君の身柄を我々評議会が保護させてもらう」
怪は、混乱で言葉がうまく出せなかった。
蘇生？何を言っているのだろう。
「……私が、…蘇生の…魔人？」
「そうだ。その証拠に、君の兄・内海妖(うつみよう)は体を貫かれたにもかかわらず、こうして生きている。君の力は、奴が言った通り〝その対象の人間を一度だけ蘇生する力〟だ。これは〝禁忌の第四の力〟の蘇生に当て嵌まる。よって、政府が君を保護する。反論は認めない」
「慧翠！突然そんな話しないで！混乱状態のこの子がまともに返答できるとお思い！？」
するとり、蘭玉の腕をするり、と抜け、怪が慧翠の前に立つ。
「…私は、――――――――」

＊＊＊　＊＊＊

逆東京　とある病院

個室のベッドに寝かされた妖は、やがて目を覚まし、自分の横でうたた寝する怪を見つける。
「…怪？」
「…んっ。…？兄さん！！」
「ここ、ビョーイン」
はっと怪は自分の口を手で抑えた。妖は上半身を起こし、右手で怪の頭を撫でた。
「…なんで僕、生きてんのや？」
あの時、確かに自分は男の手によって、体を貫かれた。はずなのに…。あの瞬間のことは鮮明に覚えているのに…。

「あの…、あのね。兄さんが倒れた後、すぐに蘭玉様と芦原様が駆けつけてくれて、兄さんは一命を取り留めたの。大丈夫、そんなに深くなくて、痕も残らないって」
「そうか、心配させて堪忍な」
怪は静かに首を横に振った。月明かりで照らす個室で、怪はカバンから綺麗にラッピングされた箱を取り出す。箱には母によるバースデーカードが添えられていた。
「！これ、お袋！？」
「うん。こっそり準備してたらしいの。ほら、私の誕生日、明後日でしょ？」
怪は涙ぐみながら、丁寧にラッピングを解いていく。中には、チェーンの2つ付いた大極図のペンダントが入っていた。
これを見て、2人はハッとあることを思い出す。
「これって…。昔私が、店先で欲しいって強請ったペアのネックレス！」
「せや！せやけど、高こうて買わんかったんや」
「そう…。お母さんは、“大切な人が出来た時、2人で仲良うつけたらえぇ”って…。…っお母さん……！」
涙で滲むメッセージカード。でも怪は、それをぐっと堪え、ペンダントを2つに分けて、黒い方を妖に渡す。
「…もろうても、えぇの？」
「うん。兄さんに貰ってほしいの」
「…おおきに！めっちゃ大事にするわ」
「これで、私と兄さんが、どんなに離れていても一緒。ずっと、一緒だよ？」
「せやな。言われんでも、一緒や」
「…うん」
2人はその後、少し話しをしてから、怪は病室を去って行った。
病院を出たところには、芦原慧翠と使用人の運転する車が停車して

いた。
「別れは…済んだか？」
「…別れじゃ、ありませんよ。…必ず、妖はここまで来てくれる」
怪は一時、妖の病室を見上げると大人しく車に乗った。

＊＊＊　＊＊＊

翌日。傷も完治し、平気と言われて退院した妖。そんな彼を待っていたのは、最愛の妹との別れ。
「っ！そないな話！？っ…嘘や！！怪が…ッ」
「腹ァ括れ。ワシ等じゃ、力不足じゃ」
「っ！！畜生ッッッ！！！」
妖の苦痛で悲痛な叫びは、逆東京に響き渡った。

仲睦まじい兄妹（きょうだい）。
離れ離れになった2人に残ったのは、
虚しい想いと、片割れの勾玉のみ…。

――――――――――――せやから、今度こそ
…！――――――――――――

愛しき人の言葉（後書き）

＊次回予告

許されない。そんなこと知ってる。どんな目で見られようと、軽蔑されようと、私はこの想いを捨てたりしない。

けど、決して伝わらないのは……。

次回『妹が兄を愛した禁忌』

許されなくてもいい。
軽蔑されたっていい。
私は、妖を…兄を、愛しています。

＊＊＊＊　現在　＊＊＊＊

雨音の響く部屋は沈黙に覆われた。過去話を耳にした隆樹と羅刹は、昔ある少年を守ってある少女を愛した『御堂ツバサ』のことを思い出していた。　そこで、沈黙を破ったのは、怪だった。
「私は、今でも全てを後悔している。…でも、間違ってるとは、思わない。あれが最善の方法だったから。それでも、選択肢が無数になかった、無力な自分に、私は、何年も後悔してるの」
「…怪クン。…いえ、石榴様。内海妖が負傷したため、以後我々が護衛につきます。よろしいですか？」
「えぇ。少し、一人にしてください。大丈夫、もう庭園には出ません」
「はい」
怪は少々疲れた様子で部屋から出て行った。向かった先は妖の眠っている個室。扉を開けると、妖の眠るベッドの隣で椅子に座ってうたた寝する祖父の舜英がいた。
「おじいちゃん、おじいちゃん」
「…む？怪か」
「ちょっとだけ、席を外してくれる？」
「……ちょっとだけじゃぞ？」

「うん」
椅子を持って廊下で待つことにした舜英。
二人きりになった妖と怪。怪は静かに眠る妖に歩み寄り、額に手を当てた。顔色が良く、怪はほっとした。それと同時に、これは私のせいだという自分の非力さを痛感させられる。この傷は自分を庇って付いた傷。自分は結局、守られてばかりだ。
怪はベッドに腰をかけ、眠る妖の頬を優しく撫でる。そうしていくうちに涙が零れてきた。
「ごめん。ごめんね、妖…兄ちゃん」
「私、あの頃から全然成長してない。昔と同じ。一人じゃ何も出来ない子。“怪”の意味は、他人より優れてるの意。でも、私は何も出来ないよ……っ」
零れた涙の粒が、妖の頬に落ちる。怪は少し、人知れず泣いた後、何事もなかったかのような顔で部屋を去って行った。そして、再度妖の看病に戻った舜英は、妖の狸寝入りに気付き、声をかける。
「なんじゃ。起きてるなら、怪に声かけてやればいいじゃないか」
「……アイツ、泣いとった。…僕は、またあないな顔をさせてもうた。…情け無いで……」
妖は、完治しかかっている下唇の噛み切った傷にまた、犬歯を突き立てる。

――――――――評議院・休憩室――――――――――――

この後の会議の前に一服しようと紅茶を入れる蘭玉の背中から近づき、彼女にそっと抱きつくのは、芦原慧翠（あしはらけいすい）。
「何？熱湯使ってるのだから、危ないわ。ピアニストが指を火傷したら大変よ」
「フン。いつの話をしてるんだ。それは、俺がまだ大魔人“露草（つゆくさ）”だった頃の話だろ？今じゃ、何も弾けないさ」

「で？何の用」
蘭玉の冷たい声色にやっと真面目に話す気になった慧翠。蘭玉から離れ、椅子に腰掛ける。
「逆神奈川で、大量に魔人、魔女が失踪している。目撃者の情報だと、犯人は右目に火傷の痕がある、黒服の男」
「！？孤陰が動いたのね。その様子だと、彼はしっかり怪の能力について知っているようね」
「あぁ。蘇生の能力は、ノーリスクで出来るわけじゃない。誰かを蘇らせるには、その時死期の近い者の魂を吸わなくてはならない。百年前の蘇生の魔人は自分の意思で魂を吸い過ぎたため処分されたが、怪の場合は、殆ど無意識だ。…一昨日亡くなった大魔人は、去年から大病を患っていた。怪は無意識にそれを察し、吸収したのだろう。それを知ってなお、四天王は彼女を次期大魔人にするのだから…、まったく」
「その危険性を知ったからこそ、怪を近くに置きたがるのよ。……あんな力さえ持たなければ、あの子がこんな思いすることはなかったのに」
辛い顔をする蘭玉と眉をひそめる慧翠。冷たく張り詰めた空気の中、現れたのは会議開始の連絡係だった。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

怪が訪れたのは、中央庭園。屋敷の中央部に位置し、庭園というよりも、ガラス製の大きなドーム状の温室だった。
その中にある噴水の傍らに怪は腰掛けていた。
「……」
そこへ傷付いた足を引きずりながら、妖が現れた。
「何や、浮かない顔やね」

「！兄さん…。傷は…平気なの？」
「べっちょない（大したことない）。怪は怪我しとらんか？」
「えぇ。兄さんが守ってくれたから。…ごめんね、私のせいで怪我ばっかりさせて」
悲しい顔をする怪の頭を優しく撫でる。
「気にせんでえぇ。僕は護柱（ナイツ）や。所属する県、お偉いさんを命賭けて守る役目がある。こない怪我、日常茶飯事や」
「そんな…！なんで兄さんがそんな辛い役目を担わなくちゃいけないの！？」
「怪。えぇか？これは僕が自分で選んだ道や。全ては、最愛の妹を守るためや」

――――――……え？

今、兄は何と言った？
怪は少しの間、頭の中が真っ白になった。ここは冗談だと笑って誤魔化したいが、妖の表情があまりにも真面目だったため、怪はどうしていいか分からず、堅く口を閉ざしていた。
すると、妖の両手が怪の頬を包むようにして現れ、優しく自分の方へ向かせた。妖の細い薄荷色の瞳と目が合い、怪は恥ずかしくて視線を逸らした。が、妖が耳元で囁き、視線を戻す。
「ちゃんと、僕を見て」
「！……っ兄さん」
「怪。好きや、めっちゃ好きや。ずっと好きやった。せやから、この勾玉も手放せんかった。僕が守るから、怪、一緒に逃げよう」
怪は妖のその言葉に、心が揺れた。
逃げる。兄さんと…？二人で…？
「…っ。ダメよ、出来ない」

怪は静かに妖から離れる。距離をとっても、体の震えは止まらなかった。
このまま兄に飛びついて、一緒にこの場から逃げたい。何もかも投げ出して。
しかし、それではダメなんだ。
「私は、大魔人・内海怪！ここで、逃げるわけにはいかないの。ごめんね。…そして、ありがとう。やっと言える。ずっと、ずっと、この気持ちを押し殺して生きなくちゃいけないと、思っていたの。私なんかを好きになってくれて、ありがとう。兄さん……、いえ、私は妖が好きです。愛しています…っ」
怪は自分の本当の想いを打ち明けられ、今まで我慢していた涙を全て流した。

その刹那(とき)。

駆け寄った妖は、無言で怪を抱き締めた。
「兄…さん？」
「…なんや。僕ら、両思いやったんか。おおきに」
「…うん。…っうん、私、もっと、もっと、兄さんと…っ一緒にいたいよ……っ！」
「っ…。……」
妖は、怪の強い願望を叶えてあげられない自分の非力さに唇を噛み締めた。その悔しさをかき消すように、怪を目一杯抱き締めた。
「やっぱ逃げよう。僕が、怪を守るから。２人で、隠れて暮らそうや」
「……。でも、私がこの力を持ってる限り、世界からじゃ逃れられない。私、逃げないよ。大魔人になって、兄さんを守るって決めたの。だから、私、――――――」

バサッ…

怪の言葉を遮って、間に割って入ってきた黒いモノ。コートから覗く、右目の火傷の痕に、妖はギョッとした。

「内海怪。お前の力、貸してもらうぞ」

「！…っ?!」

逃げようとした怪の腕を掴み、自分の方へ引き寄せる孤陰。あと一歩のところで届かなかった妖の手は、空を掴む。

「ッ！怪！！」

「兄さっ――――――」

黒い影に包まれた孤陰と怪は、妖の目の前から跡形も無く消えてしまった。

呆然とそこに立ち尽くす妖は、おぼつかない足で砂利を踏みしめる。

そして、叫びを噛み殺し、体中の傷の激痛によって、その場に倒れる。

薄れていく意識の中で、胸の勾玉を力ない手で掴む。そして、心の中でその名を呼ぶ。

――――――――――怪……――――――

――――――

妹が兄を愛した禁忌（後書き）

＊次回予告

アナタと私たち兄妹は似ている。あなたは、アナタの愛したたった一人の姉を助けようとした。

けれど、私はもう子どもじゃないから…。

次回『氷の涙』

氷の涙

どんな形でも、愛してしまえば、誰にも止められない。

兄さん。　大好きな妖兄さん。

どうか、　もう私のために傷付かないで。

私も…　強くなるから。

＊＊＊　＊＊＊

屋敷内　とある一室

≪ガシャン≫

薬品の瓶が床に落ちて割れた。既に何本も割れて床に散らばっており、部屋の中には薬の臭いが充満していた。

ベッドの傍らでは、今にも屋敷を飛び出していきそうな妖を抑える桑田宗助（くわたそうすけ）と内海舜英（うつみしゅんえい）がいた。

羅刹と隆樹はドアの前に控えている。そして、この状態が数分続いている。

「妖クン、落ち着いて！」

「落ち着いていられへんわ！怪が連れてかれたんやで？！」

「妖！そんな体で行っても死ぬだけじゃ！今、他の管理者らや魔警団が捜してる！今は待つのじゃ」

「ッ……！　僕が傍にいながら、怪は攫われたんや！僕が…ッ俺が…っ！」
「妖クン…っ」
桑田は妖の強い自分への腹立たしさを感じ共感しながらも、その手を離すことは出来なかった。

「…　≪氷雪像(ひょうせつぞう)　その３３　氷銀檻倉(ひょうぎんかんそう)≫！」

「「！？」」
その時、桑田と舜英の頭上に氷の檻が現れ、２人に囲むように落下していきた。そのはずみで桑田の手が離れ、妖は部屋の外に。しかし、そこには見張りをしていた羅刹と隆樹がいた。
「妖！？」
「っ！堪忍な」
「…！？」
妖は立ち向かってくる羅刹の攻撃をあっさり避け、背後から手刀で羅刹の首筋を打った。
「…くっ！？」
「羅刹！」
体勢を崩しそうになった羅刹を支えた隆樹の横を妖が走り抜けていく。
門を抜け、ひたすら走り続ける妖。傷が疼こうが、関係なかった。ただ、怪のことだけ考えて…。

＊＊＊逆神奈川県　とある空き地＊＊＊

目を覚ました怪の眼に映ったのは、空き地に描かれた大きな陣(サークル)と、

孤陰の姿だった。
「目覚めたか、内海怪」
「っ…。私を捕まえて、何をさせる気？」
怪のその問いに孤陰は少し驚いたような表情を見せた。
「フフフッ。何を言ってるんだ。君は自分の能力（チカラ）を知らないわけではないだろう？」
「まっ、まさか…！？」
「そう。私は、君に蘇生してもらいたい人がいる」
「一体、誰…を？」
孤陰はその問いに、表情が曇った。怪はその表情に、言葉を失った。そして、孤陰は静かに言う。
「私の姉だ」
「お姉さん…？」
「あぁ。栞鳳（しおん）という名で、美しい人だった」
「栞鳳………、！？歴代の煉獄王！」
聞き覚えのあるその名に、怪は思わず声を荒げた。
栞鳳（しおん）。歴代煉獄王、第427代にして初の女王である。その残虐さは今でも畏怖され、語り継がれているほど。
「その栞鳳が…アナタの姉？」
「あぁ。優しくて、美しい人だった。今も語られる姉の残虐歴史は、全て私たちの父だ。煉獄王になれなかった父は、姉を補佐する影で全てを滅した。……あれは酷いものだった」
「だから、姉を蘇生しろと？煉獄王を」
「……お前は知っているか？“煉炎病（れんえんびょう）”という病を」
怪は聞き慣れない言葉に、首を傾げた。孤陰は、フッと笑って話しを続けた。
「煉炎病は、煉獄王に罹る不治の病だ。煉獄王が煉獄界の炎の毒素にやられて、60日間で死に至る病。姉の栞鳳（しおん）はそれに早く罹り、煉獄王は2年しかやっていない。……こっちでは、姉はどういう死を迎えたことになっている？」

「……。悪行が過ぎて、魔王の一族に殺された、と習った」
孤陰は悲しい表情を浮かべ、再度語る。
「そうか。…姉は、とても優しい人だったよ。“初代の過ち”を修正するために、魔王との行動を計ったりしていたさ。しかし、病はジワジワと姉を蝕んでいった。…そして、最後は炎に内側から身を焼かれ、灰となった。あの姉の姿を一時も忘れたことはない。…さぁ、内海怪。我が姉を、お前の力で再びこの世界に…！」
「でも…、その人の亡骸がないと…」
「それならば、ここにある」
と、孤陰が懐から灰の入った小瓶を出して見せた。怪は、これが先程話していた『灰となった姉』だとすぐわかった。
しかし、怪は強い眼差しで孤陰にこう言い放つ。
「それは、出来ません」
「！何故だ！？」
「お忘れですか？私は次期、大魔人となります。この逆世界にとって、煉獄王が二人になることは、決して良い事ではありません。何より、この様に私を攫って願いを叶えてもらおうなどと、私はそこまでお人好しではありません！！分かったのなら、この逆世界を去りなさい。そうすれば、牢に入れることは諦めましょう」
１人の魔人として、堂々たる怪に孤陰は動揺したが、すぐに本来の調子を戻し、妖しく微笑み、指を鳴らした。
すると、怪の足元の陣が発動した。
「！？結界陣！？」
「内海怪。そこで大人しく見ているがいい。お前が蘇生する、と言うまでお前の大切な者達を殺し続けるとしよう」
「！！」
「最初は……　やはり、お前の愛しい兄か？」
怪はその言葉に、サーッと血の気が引いた。そして、怪は懐に隠していたナイフを取り出し、自分の胸に突きつけた。
「！？」

「孤陰。私は、アナタの野望を打ち砕くためなら、この命を捨てることだって厭わないわ」

怪は震える手でナイフを突きたて――――――

「怪！！その手を離せ！！！」

響いたのは、兄の声。

――――――――！兄さん…ッ！！――

―――――

氷の涙（後書き）

＊次回予告

走馬灯のように、僕の中で流れた幼い頃の記憶。あの時も、辺り一面雪景色やった…。怪にしたこと、今でも少し悔やんどる。せやけど、あの笑顔に誓ったんや…。“守る”と。

次回『妖の覚悟』

妖の覚悟

決して、他人には理解されないこの想ぃ。

息をひそめて想うしかない僕ら。

それでも、守ると決めたから。

絶対に、守ってみせる！

＊＊＊＊　回想　＊＊＊＊

僕ら2人は、幼い頃からずっと一緒やった。最初は今まで独り占めしとった親の愛情を奪われた思おて、歩いて間もへん怪に意地悪(いけず)して雪ん中に置き去りした。夕方になっても帰ってこんさかい、仕方なく捜しに行かはったら、怪は置き去りにされた雪だるまの隣で倒れとった。怪は、置き去りにされとったことも知らず、笑って“おかえり”と言った。その瞬間、胸を押し潰すような罪悪感が浮上し、怪をおっぱ（おんぶ）して家へと走った。

怪は翌日、風邪をひいた。おじんにはめっちゃ叱られたけんど、おとんは僕の頭を撫でてくれた。

「よく頑張ったな。怪を助けてくれて、ありがとう、妖。流石、お兄ちゃん」

「啓祐！お前は自分の子に甘いぞ！」

「えぇ？我が子に甘ぃのって普通でしょ？和香、怪の具合はどう？」

「えぇよ。最前(さいぜん)起きて、兄ちゃんに会いたい、て言うてはるんよ。せやけど、風邪移っちゃあかんしなぁ」

「大丈夫だよ。ほら、行っておいで、妖」

僕はおとんに言われるまま、怪の部屋へ向かう。怪は赤い顔をしてベッドに座っていた。それを見たおとんは、怪をベッドに寝かせた。
「怪、起き上がっちゃダメだろ？」
「えへへ。ごめんね…パパ」
無邪気な怪の笑顔に、妖は胸が苦しくなった。
すると、その笑みが妖にも向けられた。
「にーちゃん、おはよう」
「…っ」
何も知らずに無邪気に感謝の言葉を自分へ向ける怪の姿に、妖は自分のやったことの重さがやっと理解できた。と、同時にこの笑顔を、この大事な妹を自分が守らなければ、という一つの決意が固まった。
妖はベッドにいる怪を見つめ、ぐっと袖で涙をぬぐって笑みを返した。
「はよう元気になってな！」
「…うん！そしたら、またあそぼ！」

＊＊＊＊　＊＊＊＊

嗚呼。自分はこの笑顔を守る為に、生まれてきたも同然なんや。
怪はあの時から僕の世界のすべてやった。それを守るためやったら、僕は、鬼にも修羅にもなれる。
大事な…　大事な…　俺の妹。
「はぁ…　ハァ…　」

無様に地面に這い蹲ろうと、

「ハァ…　はぁ…　」

無様に相手を見上げようと、

「かは…っ　はぁ…」

俺は、何度でも立ち上がるんや！

「孤陰ェ。もう容赦せんでっ、ぶちのめしたる！！！」

＊＊＊＊　回想2　＊＊＊＊

兄さん。私、実は知ってるの。あの時、兄さんが雪の中、私を故意に置き去りにしたことを。でも、置き去りにされたと知ってもなお、私は兄さんを待ってたの。きっと、兄さんはここへ帰って来ると、信じて。

寒くて、もうダメかと雪に抱かれながらそう思った。けど、光の差す方から、兄さんの声がした。

「怪！？怪！！」

兄さんの手は温かくて、ほっとした私は消え入りそうな弱々しい声で、おかえり　と言った。その後は、兄さんが必死に私をおんぶして走っているのを感じながら、意識は沈んでいった。

気付いた時、私は見慣れた天井を目にし、ここが自分の家のベッドの上だと分かった。傍らにで、母さんが私の看病をしてくれていた。

「おはようさん。体の塩梅（あんばい）はどうや？」

「だいじょーぶだよ。…にーちゃんは？」
「隣の部屋におるよ。おじいちゃんに怒られてんの」
「…あっちゃ、ダメかな？」
「ん〜。ちょう待ち。啓祐に聞いてくるわ」
母さんは部屋を出て、数分後兄さんを連れて戻ってきた。申し訳なさそうに俯く兄に、目一杯の笑顔で、おはよう、と言った。その顔に泣きそうになった兄さんは自信なく笑って、私にこう言った。
「はよう元気になってな！」

今思えば、私は兄さんによって生かされたのだ。兄に命を奪われかけ、兄に命を救われた。
だから私は、せめてこの命を兄さんのために使おうと決めた。

「兄さん、お願い。勝って！」

＊＊＊　＊＊＊

「…そうだな。そろそろ決着つけようか、孤陰」
傷口を抑えながら、青年は平静に、しかし瞳は冷たく、孤陰に今までにない殺気を向けた。
――――――――――――お遊びはしまいや。本気でいくでェ――――――――――――

妖の覚悟（後書き）

＊次回予告
私たちと、アナタはきっと似ているんだ。自分のために、互いのために、守る。けど、私たちとアナタでは、一つだけ、違うところがあるの。それはね…。

次回『絶対氷結領域（オブ・ビディオン）』

絶対氷結領域（オブ・ビディオン）

きっと、私たちは似てるんだよ。
お互いに、お互いを守りたくて、傷付いて、
でも、一番守りたいのは、自らの誓い。
私たちは、“約束”という2つの勾玉で、縛られて
どこにいても、繋がっている。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

妖は懐からグローブの石と同じ、薄氷色(アイスブルー)の宝玉を6つ取り出し、孤陰の四方八方にまるで結界を張るようにして投げた。
妖は石を設置すると、印を結び、何か呪文を唱え始めた。
「“我は氷に属せし者。その心は冷たく凍てつき、その身は氷そのもの。全てを捧げし我に、汝の冷たき氷雪を与えたまえ　――――――――――――」
「！その詠唱はっ　まさか…！？」
孤陰は何かを祭して一歩、後退(あとずさ)った。しかし、もう遅かった。石の置かれた場所まで来ると、見えない壁で退路を塞がれた。
「“――――――全てを見透し、全てを切り裂く絶対の世界よ。道標を辿り、我が前に世界を創れ。我の敵を冷たき屍へと変えろ！氷帝の王子が命ずる、『氷結限界“禁忌”その2・絶対氷結領域(オブ・ビディオン)』！！”」

すると、散りばめられた宝玉から氷の柱が生まれ、孤陰を囲むように氷柱が立てられ、伸びた氷柱が孤陰を囲み空を覆い、氷のドームを作り上げた。

「くっ！絶対氷結領域（オブ・ビディオン）！禁忌とされる氷雪系最強の術式。囲むだけでなく攻撃にも特化している結界術の最強術。まさか、取得していたとは……っ！侮れんな、内海妖！！」

「散れ、孤陰」

妖の冷たい言葉と鳴らした指の音が氷の中で響いた。

孤陰の閉じ込められた結界の中で、背後の氷の柱が砕ける音を察した。それと同時に背に鈍い痛みを感じた。振り返ってみると、背中に鋭い氷の矢が刺さっていた。

そして、背中に気をとられているうちに、いつの間にか自分の足は氷で動かなくなっていた。

孤陰は焦りを見せながらも、冷静な口調で妖を称賛した。

「なるほど。私の足元を凍らせて動きを封じ、遠隔操作で中の氷を割って、その破片で相手に傷を付ける。…フッ。腕を上げたな、内海妖。父を超えたか」

「もちろん、それだけじゃない。これは親父の真似に過ぎない。こっからが、俺のオリジナルだ」

妖が両手を前に差し出し、まるで何かを操るかのように計画的に指を動かした。

一方、氷の中では、氷の壁がまるで液体のように揺れ、形を変えていた。

「なっ、なんだ！？」

うろたえる孤陰に真下から、氷の柱の攻撃が襲い掛かった。その切っ先は孤陰の頬を掠めたが、驚愕する暇もなく、次の攻撃が降りかかった。ぴちゃっ　と孤陰の頬に冷たい液体が落ちてきた。ゆっくりと上に目線を上げると、天井の氷がまるで溶けたかのように、水となって雫が滴り落ちていた。

「溶けている…？何故だ…」

孤陰が呆然と天を仰いでいると、外にいる妖は差し出していた手を下に、立てた親指を地に向けた。
「“堕ちろ”」
妖の言葉に従うように天井の水は再び氷となり、その形は矢となっていた。孤陰は慌てて避けようとしたが、雨のように降り注ぐそれは、エモノを決して逃しはしなかった。
氷の刃は孤陰の腕や肩、体中に突き刺さり、鮮血を流した。
「ぐぁっ！！」
孤陰はその場に倒れ、同時に氷の結界も砕けて散った。
妖は地面に刺さっていた結界の残骸の氷を引き抜き、孤陰にゆっくりと近づいていく。
「に、兄さん…？」
怪のか細い声は妖には届かず、妖は氷の刃を振りかざし、孤陰に突き刺そうとした。
意識がたゆたう中、孤陰は死を覚悟し、過去の走馬灯が頭の中を過(よ)ぎった。

＊＊＊＊　回想　＊＊＊＊

「…かげ、水陰(みかげ)！起きて！」
木陰で昼寝をしている青年に声を掛ける女性が一人。
「ん…っ。栞鳳(しおん)姉さん？」
「もう、こんなところで寝て！？ダメでしょ？」
「仕事は？」
「父様に任せてきたわ。今日も集会があるけど、どうせジジィたちのグチ話よ」
栞鳳(しおん)は水陰(みかげ)の隣に座り、楽しそうに話しながら空を見上げた。
「ねぇ、水陰(みかげ)。この煉獄と逆世界は、本当に一つになることが出来るのかしら？私たちの先代の煉獄王の所業によって、この世界は周

りから迫害されてきたわ。そんな私達が、本当に…　」
「姉さん。そんな弱気になっちゃダメだよ。姉さんは逆世界と和平の道を辿るために、今まで頑張ってきたじゃないか」
「……そうね。もう煉炎病（れんえんびょう）で目は殆ど見えない。けど、まだ出来ることがあるわよね」
栞鳳（しおん）は水陰（みかげ）に優しく微笑んだ。

この時既に、栞鳳（しおん）は煉炎病によって、ほとんど体を動かせない状態だった。それでも、和平のために、必死に煉獄王を演じていた。
そして、姉は志半ばで命を落とした。死に際に、姉は苦しそうな表情で、私に言った。
「水陰（みかげ）。私の愛しい弟。私は世界を変えられず、志半ばで朽ちる。だけど、アナタがこの世界にいる限り、アナタが私の思いを受け継いでくれる。だから、お願いね。水陰（みかげ）…」
弱々しく告げた姉。私はその温かさをもう一度感じたくて、私は“水陰（みかげ）”を捨てて、孤高に生きる“孤陰（こかげ）”として生きることを決め、『蘇生の魔人』を捜した。
姉のために、自分のために、

＊＊＊　現在　＊＊＊

「す、まない…　栞鳳（しおん）…」
孤陰が静かに目を閉じ、刃を受け入れる覚悟をした。
しかし…

「妖！やめて！！」

怪の叫び声が響いた。妖はその声に我に返り、孤陰に突き刺そうとした刃を首元寸前で止めた。妖の後ろには、泣きそうな表情の怪

が立っていた。
「怪…」
「もういい。もういいよ、兄さん！」
妖はその表情に心が痛み、氷の刃を投げ捨てた。そして、孤陰の胸倉を掴んで、上半身を起き上がらせた。
「何死のうとしてんだよ、お前」
「な…っ」
「勘違いすンな。俺はお前を助けたわけじゃない。孤陰、お前にはこの世界の法で罪を償う権利がある」
呆然とする孤陰に、妖は構わず続けた。
「…俺は、お前のやろうとしたことを全力で否定することは出来ない。俺もきっと、怪を不合理な形で亡くしたら、お前と同じことをすると思う。けどな、お前と俺じゃあ、決定的に違うとこがある。それはな、俺は道を踏み外しても、必ず俺の中の怪が止めてくれるんだ」
「っ…」
「“それは間違ってる”って言ってくれる。俺の中の怪は、思い出として生きているから。孤陰、お前の姉は今でも、お前の中にいるか？」
その問いに、孤陰は答えることが出来なかった。
姉を生き返らせる。その事だけ考えていた時は、姉のあの笑顔を忘れていた。自分は、姉のために行動したんじゃない。自らのために行動したのだと、知った。
「フッ…。結局、私は何も果たせなかったか…」
脱力した孤陰に、ゆっくりと近づき、その手をとったのは怪だった。
「確かに、アナタのやり方は間違っていたわ。けどね、いつか必ず、アナタのお姉さんの正義感が証明されたら、私が蘇らせます。…次回は、無理やりではなく、礼節を持って来てください」
怪の温かさに触れ、優しさを感じた孤影は、静かに涙した。

そして、間もなくして魔人警察が到着し、孤陰を捕縛した。他の仲間たちは、隆樹や羅刹によって倒されたらしい。
車に乗せられる際、孤陰は一度振り返って、やわらかく微笑んで、一言告げた。
「内海妖、内海怪。お前達に会えて、よかった」
そう告げると、孤陰を乗せた車は去っていった。

残された妖と怪は、少し2人で歩いてると微かな潮の香りが漂ってきた。海が近いようだ。
「終わったね」
「せやな」
「なんか、寂しい感じ」
「せやな」
怪はそっと、妖に問いかけた。
「ねぇ、兄さん」
「ん？」
「兄さんは、この後どうしたい？」
その問いに、妖は一瞬戸惑ったが、少し笑って答えた。
――――――――――――僕は…――――――
――――――――

絶対氷結領域（オブ・ビディオン）（後書き）

＊次回予告
決して、ずっと一緒にはいられなくても。
決して、結ばれることがなくても。

この切ない想いが消えることは…　ない。

次回『エピローグ』

エピローグ

雪が降る。
雪が積もる。
雪が…溶ける。
私達が真っ白な雪の上に残した軌跡（あしあと）。
これは、決して消えはしない。
私達の足跡…。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

「結局、２人はどうなったんだ？」
評議会長・芦原慧翠（あしはらけいすい）が、コーヒーを飲みながら、楽しそうに尋ねる。
その問いに、蘭玉が答える。
「逃げなかったわ。残された護衛最終日に、２人で部屋に篭もってたそうよ」
「フーン。俺だったら逃げたな～」
「やらなくちゃいけないことがあるのよ」
「？」

＊＊＊＊　数日前　＊＊＊＊

怪は、護衛最終日に妖を部屋に呼んで、無言で鋏を差し出した。
「？何ですか」
「最後に、“兄さん”に髪を切ってほしいの」
「…切ってしもうてえぇの？折角、伸ばしたんに」
「いいの。そろそろ邪魔になってきたし。　お願い」
妖は少し悩んで、ゆっくり鋏を受け取った。
「仰せのままに」

しゃきん　しゃきん
と、規則的に響く鋏の音と同時に、怪の栗色の髪がバラバラと床に落ちた。
「…流石だね。兄さん、手先が器用」
「薬師は手先が器用やないとあかん、ておじんがゆってたんや。せやから、こんなんも練習させられた」
「…ごめんね。一緒にいられなくて…」
怪の小さな呟きに、妖は鋏の手を止め、それをテーブルに置くと、怪の体を後ろから抱き締めた。
「…逃げようや。苦しいことからも、辛いことからも。僕が怪を守ったるから。怪」
必死に説得する妖の声は、少し震えていた。そんな妖を慰めるように怪は抱き締める手に両手を添えた。
「ごめんね。私、ここに残らなきゃいけないの」
その悲しい返答に、妖は苦痛の表情を隠そうと怪の肩口に顔を埋めた。怪も泣きそうになりながらも、続けた。
「私は、私に出来る何かをしに行くんだよ。私は大魔人になって、この世界を変えたい。煉獄（てんごく）とこの世界を和解させたいの。そしたら、きっと孤陰さんのお姉さんを蘇生できるかもしれない。　そうでしょ？」
「……」
「逃げても、きっとすぐ捕まるわ。もう逃げない。そう、決めたの。

大丈夫よ、離れていても、私と兄さんはずっと一緒よ」
そう言って怪は、立ち上がって棚の一番上の引き出しから、埃を被ったペンダントを取り出した。それは、妖が持っている物の片割れだった。
「怪…それ」
「捨てたと思った？まさか。私がもう一つを兄さんにあげたんだよ？これを見るたびに、兄さんを思い出してたの」
「…すまへん。すまへんな…怪。堪忍な。弱くてすまへん。守れんで堪忍な。怪、ほんに強うなったな」
「当たり前でしょ？“怪”の意味は、常識を超えて優れていること、だよ！私もいつまでも弱いわけじゃないよ！！」
「…せやな。流石、僕の愛する怪や。　……またな」
「…うん」
怪は柔らかく微笑んで妖に抱きついた。

＊＊＊　♪♪♪　＊＊＊

ある日の昼下がり、蘭瑛にて。

いつも通り、店番する妖は愛用の煙管を吸っていた。その首にはペンダントがかけられていた。
「いらっしゃい」
いつも通り。
カウンターには新聞があり、その特集には『新大魔人・内海怪』とあった。
そして、今日はその内海怪の就任式だった。

【怪の屋敷】

「怪様。十二単の準備が出来ました。式に行きますよ」

「えぇ。でも、蘭玉様のお古をお借りしてよろしかったのでしょうか？」

色鮮やかな十二単を纏った怪が、ドアの向こうの蘭玉に問いかけた。蘭玉の楽しそうな笑い声が聞こえた。

「フフフ。いいのよ。大切な妹分の式ですもの。もう私（わたくし）着れませんし」

「ありがとうございます。では、参ります」

美しいその姿の胸元には、ペンダントが輝いていた。

＊＊＊＊　同時刻　＊＊＊＊

【逆茨城・芦原家】

暗い部屋で一人、何者かと会話する芦原慧翠（あしはらけいすい）。

「そうか、式は無事終わったか。…フッ。生きる場所が違えど、お互いの切ない想いは、永遠に消えることはない　…か。

……ん？いや、こっちの話だ。それより、四天王…いや、元老院はどのような決断をした？」

　その問いに、会話する若い男の声は答えた。

『“煉獄眼（ディスホールド）の異端審問”を決定した』

「ほぉ…。御堂隆樹（みどうたかき）の…。　…出動するのが“あの男”だと知ってか否か。皮肉だな」

『断りますか？』

「いや、いい。引き受けよう。なぁ、アキラ」

　意識を少しの間、会話から外し部屋の奥に待機していた男に話しかけた。

――――――――――面白くなりそうだ

――――――――――――

エピローグ（後書き）

Xの章、終了。

プロローグ

昔、私が抱いたぬくもりは、とても優しかった。
その名残は、今でも手に残っている。

しかし、今ではそれも失われてしまった…。

＊＊＊　＊＊＊

逆東京　桑田邸
（隆樹の独白）

俺はまだ、桑田さんへの不信感を消せないでいる。桑田さんの行動や言動には怪しい点が多々ある。
それでも、ゆるーい桑田さんのペースのせいで、あまり思考が読めない。

俺は今日、桑田さんから借りた逆世界の基礎知識についての本を読んでいた。

「逆世界で最高権力を待つのは、魔王。その下に“四天王”と呼ばれる元老院。その更に下に大魔人と評議会。地位的には、魔女もこの位に入る。そして最下位に管理者と魔人。元老院や評議会などに所属する役職には、管理者監察者や、…審判者（ジャッジメント）？」
その最後の言葉に、羅刹と桑田が反応を示した。それを説明したのは、桑田だった。
「審判者（ジャッジメント）というのはね、元老院や評議会からの命令で、魔人や魔女を審判する者たちのことだよ。主にこの職に就くのは、元老院と評

議会に属する者の家に仕える家柄の人間たちだよ。絶対に裏切らないようにね」

「へぇ…。すごいですね」

「うん…、　そうだね」

逆世界に益々興味が湧いた隆樹は、視線をもう一度本に戻した。

その時。

ドアをノックする音が静かな桑田たちの耳に届いた。それに対応したのは、掃除中だった羅刹。

「はーい。どなたですか？」

「失礼する」

低い男の声がしたと同時に、羅刹を押しのけてドアが開いた。現れたのは、黒マントの男と女。その顔を見た桑田の表情が強張った。

「……ア、アキラさん…ッ！」

「アキラ？」

「我が名は、審判者（ジャッジメント）の御堂アキラ。逆長崎を管理する御堂家の当主だ」

男の名に、隆樹は驚愕した。そしてゆっくりと、桑田が唇を動かす。

「彼は、芦原慧翠に仕える者であり、蘭玉様とツバサ君の、実の父親だ！」

「兄貴の…！？」

「アキラさん、この逆東京に何の用ですか？」

冷静さを取り戻した桑田が、アキラと未だマントを被ったままの女を軽く睨んで言う。その問いには、女の方が答えた。

「もちろん任務です。“煉獄眼保持者（ディスホールド）の捕縛、および異端審問の実施”」

「あ、アナタは…っ」

「紹介が遅れました。私は、アキラ様の部下、および逆千葉管理者・樋口美輪（ひぐちみわ）です」

「樋口って…」

「そう。私はあの、重罪人・乃輪の姉よ。我が愚妹のことを知っていたなんてね」
美輪は嫌そうに言った。その様子に隆樹は少し首を傾げる。その横で、桑田が声を荒げて言う。
「アキラさん、異端審問とは、厳重処罰確定の懲罰審問ですよね！？隆樹クンをそれに！？」
「そうです。これは、元老院長の命令です。大人しく従ってもらおう、御堂隆樹（みどうたかき）」
隆樹は少し躊躇うが、抗う術がなく大人しく頷いた。それを止めようした羅刹を踏み止まらせたのは、苦渋の表情を浮かべる桑田だった。
「隆樹！」
「羅刹クン、ここは堪えて」

「せやで、羅刹チャン？」

もう一人、部屋の隅にいた内海妖（うつみよう）も羅刹を止める。羅刹は悔しそうに唇を噛み締めると、桑田の手を振り払い、奥の部屋に引っ込んでしまった。
隆樹の腕は後ろで手錠をはめられ、アキラに連れられていった。
そして、桑田の家から少し離れた公園に、美輪は木の棒で方陣（サークル）を描き、その上に乗った。不思議そうにする隆樹に、アキラが説明をする。
「逆千葉の管理者一族・樋口家特有の能力は、転移（テレポート）。自分一人なら式なしで移動できる。美輪は、“鍵の力”に不慣れでね」
「…鍵？」
「アキラ様、準備が整いました。式をお踏みください」
「あぁ」
そして、アキラ達は消え、式は砂に埋もれていった。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

桑田の家の奥に引っ込んでしまった羅刹は、少し経った後部屋から出てきた。しかし、そこに桑田も妖もいなかった。

「桑田？妖？…どこ行ったのかしら」

首を傾げていると、郵便屋の声がして外に出る。渡されたのは、自分宛の手紙だった。

「？」

いつもなら自分宛のは家の方に届けられるはず。なのに、何故今回に限って、この桑田家に届けられたのか。

そんな疑問を持ちつつ、羅刹は差出人の名前を確認する。そして、便箋に書かれていた名前に、羅刹は驚愕し息を飲んだ。

差出人は、樋口美輪（ひぐちみわ）。乃輪（わたし）の姉だ。

――――――――――――どうして……っ――

――――――――――

プロローグ（後書き）

＊次回予告

あの人の眼差しは、とても冷たかった。けど、その奥に、兄貴（ツバサ）と同じ温かさを感じたのは…。

次回『ツバサとアキラ』

ツバサとアキラ

今でも憶えてる…。

決して優しかったとは言えなかった家庭だったが、

それでも、幸せだったと言ってくれた。

私の大事な息子…。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

逆東京　裏路地にて

「ホンマにやるんか？桑田はん」
「もちろん。そのために、こうして僕は今準備してるんだよ。彼は、僕等には必要不可欠なんだ」
　桑田はコンクリートの地面にチョークで何かの術式を念入りに描き込んでいた。その様子を妖はただ見つめていた。

＊＊　＊＊

審判者（ジャッジメント）本部・仮拘置所
尋問室Ａ

　そこへ連れて来られた隆樹は、先程から向かい合うアキラの睨みを必死にかわしながら、沈黙を決め込んでいた。しかし、心の内ではアキラの威圧に圧倒されまくりだった。
「御堂隆樹。黙っていても状況は変わらんぞ」

「…」

「お前が煉獄眼（ディスホールド）保持者である限り、お前が危険因子であることに変わりはない。人である限り。」

「人で…ある限り？」

「そうだ。言っていなかったか？」

アキラに小さく頷いた隆樹。そこで出てきたのは、今まで控えていた樋口美輪だった。

「実は、元老院から一つ付け足しがあり、〝もし、御堂隆樹が人を捨て、死して霊魂となり魔人になるのなら、刑を保留とし、我々の監視下に置く事での自由を認める〟という事です」

「死して…。それは、俺に現世（むこう）で死を迎えて魔人になれってことですか？」

「そうです。そうすれば、刑は一時的に保留となり、晴れて自由の身。どうでしょう？」

隆樹は少し黙り込んだ後、顔を上げて言い放った。

「その申し出だけは受けられません。これだけは」

「何故？」

「俺が死んだら、現世にいる母親が独りになってしまう。父親は昔事故で亡くなりましたし、兄貴も生きてることにしてるけど本当はもういないし、母は親類と呼べる人達がいないから、俺がいなくなったら、母は独りぼっちになってしまう。俺は、そんなこと出来ない」

強い眼差しでアキラと対等に渡り合う隆樹の姿勢に、美輪は圧倒された。アキラは残念そうに溜め息をついた。

「…そうか。残念だ」

「でも、俺はアンタを信じてみる事にします」

「…？」

隆樹の不可解な言葉に、アキラは伏せていた視線をやっと隆樹に向けた。目がやっと合って、隆樹は小さく微笑むと、優しい声色で言う。

「アナタは、信じられると思うから。これを託します」

隆樹は左手を左目に翳した。アキラは逸早くその行動の意味に気付き、彼を凝視した。美輪は意味が分からず、首を傾げる。

「この煉獄眼は、俺と兄貴の約束です。出来れば、手放したくありません。けど、調査なら喜んでお貸しします。必ず、返していただけるのならば」

隆樹は左手の指先を左目に突き立てると、少しずつ力を加えていく。

その行動を見て、アキラが声を荒げて叫ぶ。

「お前っ！自分の左目を抉り出すつもりか！？」

「えっ！？」

隆樹は2人に構わず、ひたすら瞼に爪を続ける。やがて、爪が刺さった瞼からは血が流れ始めた。そして、そのままぐりっと眼球を取り出そうと、一気に爪に力を加えようとした。

それを瞬時に腕を掴んで阻止したのは、アキラだった。隆樹と美輪は当然驚き、阻止したアキラ自身も驚いていた。

「…え？」

ぽかん、とする隆樹に対し、カチンときたのかアキラは、怒鳴り声を発した。

「……っ！勝手なことをするな！！」

「…えっと、」

「たとえ保持者の意思であっても、煉獄眼をむやみに取り出せば、暴走する可能性がある！」

「…ごめんなさい」

アキラの初めて見せた動揺した瞳と怒声に、隆樹は驚愕して小さく謝るしかできなかった。隆樹が反省した様子を見て、アキラはほっとして腕を解放して、椅子に座り直した。

「…はぁ。今日はもう終わりにしよう。美輪、看守にコイツを牢に入れるように言っておいてくれ」

「はい」

アキラは部屋の外で見張りをしていた看守に後のことを任せて席を外そうとしたところ、それを止めたのは、隆樹から発せられた言葉だった。
「俺がどうして、アナタを信じてこんなことをしたか、わかる？」
「…」
アキラは振り向きもせず、立ち止まっている。隆樹は聞いてくれていると感じ、そのまま続ける。
「アナタが、兄貴と同じ目をしていたから。アナタは、アキラさんは、言動こそ冷たいけど、アナタはきっと誰よりも優しい。アキラさんはやっぱり、兄貴の父親だ。だから、俺はアキラさんを信じたんだよ」
「…行くぞ、美輪」
「はい」
アキラは微笑む隆樹を尻目に、鉄の扉を堅く閉じた。

アキラは少し廊下を歩いた後、仮眠室の扉の前で立ち止まる。
「アキラ様？」
「私は少し仮眠をとる。お前は午後は非番だろ？」
「はい。では、失礼させていただきます」
美輪はそう断ってアキラに一礼すると、去っていった。
アキラは一人、仮眠室へと入っていく。そして、スーツを椅子の背にかけ、ネクタイを少し緩めると、疲れた様子でベッドに身を投げた。
「っ…。小僧が…っ」
アキラが腕で視界を覆いながら思い出していたのは、隆樹のことだった。
「…何を動揺している。あの小僧は、御堂の名を語る不届き者。人のクセにアレと同じことを言う」
――――――――アキラさんは、優しいですよ。

「っ…」

――――――――――父さんは、優しいな。

「…っ忌々しいヤツめ」

アキラは隆樹への冷たい言葉を繰り返しながらも、睡魔に誘われ、ゆっくりと眠りについた。

＊＊＊＊　回想　＊＊＊＊

十数年前。
蘭星(らんせい)との強制離婚を強いられ、アキラは、御堂家の跡取りに相応しい養子を探すため、逆長崎の孤児院にやって来ていた。
孤児院には、秘書武官の山内を連れて訪れていた。
「どのくらいの年齢のお子さんがよろしいでしょうか？」
「そうだな…。小さ過ぎてもダメだ。3～5才くらいか」
アキラは玄関に腰掛けて言う。その横で、秘書の山内は溜め息をつく。
「アキラ様。ご自分で見に行く気はないのですか？」
「子どもなど、どれも同じだ」
「そう思うのなら、後妻を迎えて実子をつくられればよろしいでしょうに…」
「山内。お前にそこまでの発言権を与えた覚えはないぞ」
「申し訳ございません。出過ぎた真似を」
機嫌を悪くしたアキラは一人、外へ出た。すると、どこからか女性の子守歌が聞こえてきた。そして、その歌には聞き覚えがあった。
昔、蘭星が幼い蘭玉をあやすために歌っていた子守歌だった。

まさか、と思ったアキラは、周りを見回す。そして、孤児院の2階のテラスで赤子をあやす女性の姿を見つける。雰囲気は蘭星に似てなくもなかったが、別人であった。女はこちらに気付くことなく、赤子をあやし続ける。そこでアキラの傍に寄ってきたのは、ここの院長の老女だった。

「あの娘（こ）が抱いているのは、3日前にここに置き去りにされてた子でしてね。あの子守歌が好きなんですよ」

　アキラはその赤子に興味を持ち、その子どもと会わせてもらうこととなった。テラスに向かうと、若い女が微笑んで、赤ん坊をアキラに差し出す。小さくて温かいその命に、アキラは内心恐る恐る手を出し、そっと受け取った。その感動は、初めて蘭玉を抱いた時に似ていた。その子の顔立ちは心なしか蘭星によく似ており、首には見覚えのある首飾りがあった。それは、昔蘭星が身につけていた紅翡翠の首飾りだった。

　それを見て、アキラは確信した。この子は、自分と蘭星の子だと。アキラは迷いもせず、その子を引き取った。そして、自宅に帰った後に歪家に電話をかけた。蘭星に。

「蘭星。確かに受け取った」

「何の話かしら？」

「男（あの）の子には、ツバサと名付けて、私が引き取った」

「…“ツバサ”。良い名前をつけてもらったのね」

　やがて、蘭星は今までの想いを全て吐き出すように、言葉を発した。

「その子は…　歪家の血を引いてる男児だから、もしかしたら次期魔王として育てられたかもしれなかった…。　そんな不自由な人生を、その子に歩ませたくなくて、必死の思いで、我が子を手放したの。よかった…っ。アナタの県に連れてって正解だったわ」

「…大丈夫。あの子は、私が守るから。私が、育てるから」

　蘭星が育てられない代わりに、私がツバサを育てると決めた。し

かし、普段は厳しく接した。何故なら、ツバサは魔王にはならずとも、御堂家の当主にはなるのだから。

「父さん！見て！俺も力が使えるようになったよ！」

「…そうか」

私は冷たく返すことしか出来ず、それでもツバサは笑って返してくれる。

そして、いつだったかツバサとツバサの世話係との会話を偶然耳にした。

「坊ちゃまは、アキラ様のこと、お好きですか？」

「うん、好きだよ。父さん、大好き！」

「アキラ様は冷たくていらっしゃいます。それをお辛く感じることはありませんか？」

「…父さんはね、あぁいう人だから誤解されちゃうことが多いけど、ほんとは優しいんだ。父さんの瞳の奥には、優しさが見え隠れしてるんだ」

聞いた途端、胸が苦しくなった。今までにそう言ってくれたのは、蘭星だけだったから。その時決めたのだ。ツバサだけは、守ってやろうと。

その時、決意した。

しかし、時は来てしまった。

それは、蘭星がツバサに託した紅翡翠が引き起こしたものだった。霊力の集合体だと気付いたツバサは、研究を続けていつの間にかそれは、煉獄眼という化物と化してしまった。

そのことを私は知らず、議題に出された時、初めてそれを知った。急いで家に戻れば、ツバサが自室の中央に立ち尽くしていた。

「ツバサ…？」

「…ごめん、父さん。こんなことになっちゃって」

私は酷く動揺しているというのに、当の本人は平静な状態で、言葉を紡ぎ出していた。
「ごめんな。……こんな俺で。…御堂家の面汚しだ。父さん、俺、やっぱりここの息子には向いてないや」
「ツバサ…っ！」
次に出てくるであろう、最悪の言葉を阻もうと、必死に声を上げるが、耳は確かにそれを拾った。

「…　さよなら、父さん」

世界の時間が、自分の心臓の鼓動が、止まった気がした。
「やめろ！ツバサ！！」
「…父さんは、優しいな。でも、俺は行くよ」
すれ違い際のツバサの言葉と、尻目に映ったツバサの決意に満ちた瞳に、アキラは何もどうすることも出来なかった。
ただ、過ぎ去っていく息子の背中を背に感じながら、その場に立ち尽くしていた。

その後、元老院の決定で、御堂ツバサは現世へ追放となった。桑田宗助の扉を通って。

＊＊＊＊　現在　＊＊＊＊

悪夢に苛まれ、寝苦しさに目を覚ました。そして、今一度、御堂隆樹とツバサを重ねて思う。

――――――――――――これ以上、何を失う

という……――――――――――

ツバサとアキラ（後書き）

＊次回予告
桑田さんが欲しいのは、俺のこの力。何故、この煉獄眼をそれほどまでに欲するのか。
その裏には、とんでもない目的があったことを、俺は知る。

次回『2人の魔王』

僕はその光景を目の当たりにしていない。

しかし、あの過ちは二度と、繰り返すことは許されない。

そのために、彼が必要なんだ！

＊＊＊　＊＊＊

審判者本部（ジャッジメント）・仮拘置所

牢屋

ひとまず、牢に入れられた隆樹。自分が危険な立場い置かれているにも関わらず、隆樹は、母への言い訳を考え、その端で明日が学校休みで良かった、と安堵していた。

「…何で俺、こんなことになってんだろ？　俺は、羅刹たちと楽しくやれてれば良かったのに…」

隆樹は独り言を呟きながら、左目に手を翳す。左目には包帯が巻かれており、爪で傷つけた傷から、今も出血していた。しかし、量はそれほどではない。

「…兄貴、ごめん。兄貴との約束、手放そうとしちまった。…アキラさん、兄貴そっくりだな」

「まぁね。一応、アキラさんの実子だし」

自分以外誰もいるはずもないのに、自分の独り言に返答がきた。

牢の外にいるはずのない桑田宗助と内海妖が何食わぬ顔で立ってい

た。
「桑田さん、妖！？どうしてここに！？」
「まぁ、時間もないし、すぐ行くよ」
「せやな。僕、時間稼ぎしときますわ」
妖はどこかへ走っていってしまい、桑田はどこからか鍵の束を取り出し、一つの鍵を牢の鍵穴に差した。すると、いとも簡単に開いた。
「早く！妖クンが時間稼ぎしてる間に準備するよ」
遠くからは爆音が響き、隆樹は妖が心配になった。
桑田はそんな心配をよそに、チョークで扉に何か暗号のようなものを書き込んでいた。
「よし。妖クン、戻って！」
桑田の声を聞いて妖が戻ってきた。自慢の着物は火薬まみれだった。そして、追っ手が来る前に扉を閉める。
「妖クン！扉は開いた。開けてくれ！」
「え！？桑田さん、扉の向こうは兵でいっぱいですよ！？」
「大丈夫」
妖は自信に満ちた桑田の合図で扉を開く。そこは何もない路地に繋がっていた。隆樹は桑田に背中を押され、扉の向こうへ。
その後、追っ手が扉を蹴破ると、牢の中はもぬけの空だった。

＊＊＊　＊＊＊

逆茨城　芦原邸

『申し訳ございません。爆撃に紛れて、御堂隆樹の脱走を許してしまいました』
芦原慧翠の手にある携帯電話から、御堂アキラの声が聴こえる。
慧翠は慌てる様子もなく、優雅に紅茶の味を楽しんでいた。
「気にするな。犯人の目星はついているだろ？それなら慌てずに、負

傷者の手当てに行け。煉獄眼（ディスホールド）はその後だ」
『よろしいのですか？』
「あぁ。奴等はこの中部（関東）からは出られないさ。流石の管理者の鍵の力でも、門（ゲート）を飛び越えることは出来ないさ。そしたら、奴等の行きそうな場所は限られる。なら、負傷者を優先しろ。内海妖の氷は侮れんぞ」
『はい』
「…どうやら、嵐が来た。切るぞ」
慧翠は、誰かが廊下を歩いてくるのに気付き、電話を切った。と、同時にすごい剣幕の歪蘭玉が扉を壊さんばかりの勢いで開けてやって来た。
「どーゆうことなの！これは！？」
蘭玉は慧翠に掴みかからんが如く、怒鳴り散らした。慧翠はこんな大声を聞くのは初めてなので、さすがに目を見開いて、暫し硬直した。
「…どういうこと…とは？」
わざとはぐらかすと、蘭玉の怒りは少しだけ増した。その様子に慧翠は苦笑するしか出来なかった。
「まぁ、落ち着いて。今回のことは、元老院が決めたことだ」
「副院長の私を抜きにしてね！」
「それに対しての文句は、俺じゃなくて元老院に。まぁ、無理だろうけど」
「何でよ！？」
慧翠は椅子に座り直して続ける。
「元老院のジジィ共は会議後、それぞれの実家に帰ったそうだ」
「チッ。最悪だ。…慧翠、元老院は煉獄眼をどうしたいわけ？」
「…奴等が欲しいのは、『力』ではなく、『安全』だ」
「？安全…」
「煉獄眼は、魔王だけを消せるものじゃない。下手をすれば、魔人、魔女見境なく抹消してしまう。元老院は、自分たちが消されないいた

めに、彼を軟禁したんだ」

「…結局は自分のためか。慧翠、私の権限でこの事態、打開出来ると思うか？」

慧翠は少し考えて、無理という答えが出たのか、首を横に振った。

「不可能だな。副院長にそこまでの権限は与えられていない。かと言って、歪家の権力を使えば、蘭景（らんけい）様が黙っていないだろう」

「そう。現在歪家の最高権力保持者はである歪蘭景（ひずみらんけい）、私のお婆様がうるさいのよねぇ…」

「…それより蘭玉。君、これから大魔人会議じゃないのか？」

「…そうね。じゃあ、失礼するわ」

怒りが収まったのか、蘭玉はあっさりここを立ち去った。

静かになったところで、慧翠はこめかみに指を当てて、管理者同士のテレパシー通信を始める。

『アキラ、聴こえるか？』

『聞こえます』

『予定変更だ。御堂隆樹は、追うフリをして逃がせ』

『は？よろしいのですか』

『かまわない。あれを、元老院のクソジジィ共のおもちゃにされてたまるか。そっちの方が、俺にも都合がいい』

『…了解しました』

通信が切れ、慧翠は落ち着いてティータイムを再開した。

「…俺の都合通りに動いてくれるとうれしいんだがな。なぁ？御堂隆樹」

慧翠の怪しげな微笑みに誰も気付く事はなかった。

＊＊＊　＊＊＊

逆神奈川　空き地

そこにいたのは、桑田、妖、隆樹の３人だった。
「はぁ…。さすがに即席だったから、随分と変な場所に来ちゃったな…」
桑田がそんなことを呟いた。妖は立ち上がって着物に付いた埃や火薬の灰を払った。
「さて、これからどうします？」
「うん。ここにいてもいいけど、きっと見つかるね」
「せやけど、下手に動くと逆に見つかるんとちゃう？」
「それもそうだね…。おや？隆樹クン、その包帯は？」
「あ…。これは、俺が煉獄眼を取ろうとしたから…」
その答えに、桑田も妖も驚愕した。しかし、その後詳しく説明され、２人共ほっと胸を撫で下ろす。隆樹はそんな様子の桑田に問いかける。
「桑田さん。一つ、いいですか？」
「ん？なんだい」
「桑田さんは、どうしてそんなに俺に良くしてくれるんですか？」
「…」
その問いに、桑田は暫し黙り込んだ。そして、隆樹は更に追及していく。
「桑田さんは、煉獄眼は欲しいんですよね？」
「それは…」
「俺は、その理由が聞きたいんです」
隆樹の追及に視線を泳がせる桑田。その様子に、痺れを切らしたかのように妖が割り込んで溜め息一つ。
「桑田はん。諦めて説明しはったらどうや？」
「…隆樹クン、覚悟はいいかい？」
「はい」
桑田は近くの小さな宿場に入り、小さな部屋を借りた。そこで、桑田は床の上に大きな巻物状の書物を広げた。
「これは？」

「魔王一族の家系図だ。一番上に初代魔王・歪羅衣（ひずみらい）の名があるだろ？」
「それって、前に話してくれた、羅刹の中にいるっていう…」
「そう。今の歪家があるのは、この初代の栄光あってこそだ。そして、この初代の隣に赤で？されているとこがあるだろ？」
「はい。亡くなった方は黒なのに、どうして所々に赤の？印があるんですか？」
桑田は隆樹のその鋭い洞察力に驚きながらも、もう一つの家系図を広げた。
「こっちは、煉獄界の王のものだ。よく見て」
「あれ…？歪羅鬼（ひずみらき）？　…歪？」
「そう。煉獄王は、代々魔王の一族から出自してるんだよ」
「魔王から！？」

「始まりは、初代の時代だ。魔王が生まれる前、神がまだ存在していた頃から煉獄界はあり、王もいた。その頃は、破魔の力を持ったものが、煉獄王に選ばれていた。その頃はまだ、煉獄は天国と地獄の間にあった。
しかし、神の亡き後、魔王が現れ初代に選ばれたのが、神に寵愛されていた最古の魔女・歪羅衣だった。その際、選ばれなかった羅衣の従兄・歪羅鬼が、怒りや悲しみから“煉獄眼（ディスホールド）”を手に入れ、逆世界の大半を業火で焼き尽くした。そのせいで、いくつかの管理者一族がやられ、そこは今、歪家の分家が補っている。
そして、初代煉獄王と言われた羅鬼を倒したのは、羅衣だったんだ。体の半分を消滅されたにも関わらず、鬼王（きおう）と呼ばれた男を倒した羅衣の一族である歪家は聖なる血統として高貴な存在となった。
けど、羅鬼は死ぬ前に、煉獄界と魔王一族に呪いを残した。それは、必ず魔王一族からは煉獄王が出自されるというものと、王は王になった瞬間から死ぬまで“煉炎病（れんえんびょう）”に体内を蝕まれ、最後は業火に焼かれて死ぬ、という二つの呪いを残したんだ。　そのため、魔

王一族は尊敬されていると同時に、恐れられてきたんだ。……わかったかい？」
隆樹は一気に説明され、すべてを咀嚼しきれず、少し頭を抱えていた。その様子に、桑田は苦笑した。
「…えっと、それがどうやって、煉獄眼が欲しい理由に繋がるんですか？」
「…つまり、煉獄王も元は魔王の一族なんだから、煉獄眼で消せるってことだよ」
その言葉で、隆樹はやっと、桑田の目的を理解した。
「まさか…っ」
――――――――煉獄王を、殺す気ですか！？――――――――――

2人の魔王（後書き）

＊次回予告

生まれた時から、姉は決めたられたとこを歩いていた。

生まれた時から、妹は愛され自由なとこを歩いていた。

そんなアナタが…

憎かった≪憐れだった≫…

次回『樋口一族の汚点』

樋口一族の汚点（前書き）

年内には、この章を終わらせたい…

樋口一族の汚点

私は生まれた時から、決められたレールの上を歩いていた。
それとは反対に、妹はいつも自由だった。
それが酷く妬ましかった。

私の、大好きで、大嫌いな、

妹……。

＊＊＊　＊＊＊

時は少し遡って
逆千葉県　樋口邸

千葉の管理者であり、乃輪（わたし）の姉である樋口美輪（ひぐちみわ）に招待され、歪羅刹はこの屋敷に訪れていた。
使用人に通された応接間で、羅刹は少しの懐かしさを感じていた。自分がまだ乃輪であった頃と何一つ変わっていない実家の雰囲気に、乃輪はほっとした。
光りがいっぱいに差し込む大きな窓。美輪（あね）の趣味の甘いお香の香り。母の形見の花壇。使用人たちがいつも綺麗に磨く床。
久しく見ると、とても手入れの行き届いた綺麗な洋館だというのを改めて実感する。

そう思っていると、美輪がやって来た。無言で羅刹の向かいの一人掛けソファーに座った。

「お招きいただき、光栄です。美輪さん」

「いいえ。今日はアナタと少し話しをしたかっただけなの。羅刹様。…いえ、乃輪」

刹那。羅刹の呼吸が一瞬、止まったような気がした。

————今、何と呼ばれた…?

「あ…あの、今何と?」

震える声で問いかければ、美輪は鋭く羅刹を睨んだ。

「乃輪…って、呼んだのよ。この愚妹がっ」

「……っ。いつから?」

「少し前からよ。桔平(きっぺい)が、波長を読んでくれたの。アナタは確かに乃輪だわ」

美輪は怒りを孕んだ声色で、語る。羅刹は、この後何を言われるのか、自然と理解できた。

「よくもまぁ、のうのうと生きていられるわね。汚らわしい略奪者(テレン)め」

その言葉に羅刹は下唇を噛み締めた。

そこへ息を荒げた男が一人、部屋に飛び込んできた。

「姉上!それ以上はお止めください!!」

「桔平(きっぺい)。入ってくることは禁じたはずよ。下がりなさい」

「…兄様」

この男は、樋口桔平(ひぐちきっぺい)。美輪の弟であり、乃輪の兄である。羅刹が乃輪だと気付いた人物でもある。

幼い頃、姉と距離があった乃輪に良くしてくれた兄であり、母の亡き後の相談相手であった。

「乃輪!君は略奪者(テレン)じゃないだろ!?俺は知ってる!」

羅刹は、その時驚きと歓喜で胸が高鳴った。兄は、自分を信じてくれていると、その時嬉しくなった。

————けど、ここでそうだ、と言うわけにはいかない。

羅刹は決心したかのようにゆっくりと瞬きすると、桔平の方を真っ直ぐに見つめた。
「間違ってるよ、兄様。私は正真正銘、略奪者（テレン）だよ。羅刹と魂交換（ガルフィティア）で入れ替わって、監獄行きを逃れたサイテーの極悪人よ」
「っ――――――――――！！」
桔平は言葉を失った。羅刹は冷たい視線を送り届け、美輪はもう既に興味を失っているかのように紅茶を飲んでいた。
「それだけなら、私はこれで失礼します」
羅刹は勢いよく立ち上がると、そのまま無言で屋敷を去って行った。桔平は下唇を出血する程噛み締め、美輪は無言でカップに紅茶を注ぐ。
「姉上！いいのですか！？」
「…何が？」
「乃輪をあのまま行かせて！」
「…えぇ。あの娘（こ）の真意は理解した」
ティータイムを楽しみながら、美輪はあの日のことを思い出していた。

＊＊＊＊　回想　＊＊＊＊

一週間前　罪罰牢獄（エデン）・面会室

「Ｎｏ．４４４４。面会だよ」
白い着物を着た女性が、看守に連れられて面会室へ行く。そこには、樋口美輪が堂々と座った。
「久し振りね、乃輪」
「お久し振りです、羅刹様」
美輪は看守を全員下がらせると、静かに微笑んだ。
「…久しいね、美輪さん。よく、気付いたね」
「弟のおかげです。…今日は、魂交換（ガルフィティア）の解除についての話です」

その言葉に、乃輪は思わず笑いが零れた。
「…そのお話は結構です。私は、このままで良いのです。…いえ、このままでなくてはならないんですよ」
「…？」
「略奪者（テレン）は私です。けど、乃輪はその罪を代わりに被って、監獄入りされました。しかし、その直後に私は自分の力で、魂交換（ガルフィティア）を使って、今の状態があります。この状態が自然なんですよ。分かりますか？美輪さん」
乃輪では考えられないほど真っ直ぐな瞳に美輪は圧倒された。
その瞳で、美輪は全てを悟ったかのようにそこを去った。

＊＊＊　現在　＊＊＊

「…私はアキラ様のところに戻るわ」
「…分かった」
美輪は知らせを聞き、アキラのもとへ向かう車の中で一人、考えていた。
（乃輪、私は理解した。アナタが略奪者（テレン）でないことも、羅刹様を庇ったことも。けど、私はアナタのそんなところが――――）

――――――――――大ッ嫌いなの

よっ――――――――――

樋口一族の汚点（後書き）

＊次回予告

俺にとって、兄貴との約束は生きる糧であり、この逆世界にいられる理由になる。まだ、俺は羅刹たちと一緒に…

≪我ハ、全テヲ破壊スルモノダ…、サァ、破壊シロ、“ミドウタカキ”≫

次回『失った魔眼』

大切だった。

僕にとっても、きっと母さんにとっても。

父さんを亡くして、母の心の拠り所は、

俺と兄貴だけだったと思う。

俺にとっても、兄貴は大事な、兄弟だった。

＊＊＊　＊＊＊

煉獄王が、魔王一族の外れ者だと。

煉獄王の呪いで魔王一族からは必ず煉獄王候補が生まれてしまう。

一度にその全ての咀嚼しきれずに混乱している隆樹は放心状態で妖たちに引っ張られてながら、追っ手から逃げていた。

いずれ、海岸に出てしまい、桑田は辺りを見回し、船があるのに気付く。

「妖クン！海に逃げる！時間稼ぎを頼む！！」

「任せときィ！」

妖は隆樹を桑田に渡すと、来た道を戻り路地で追っ手を足止めした。

その間に桑田は船の準備をした。エンジンをかけると、隆樹と桑田は乗り込み、妖を呼び戻す。

妖は路地の道を氷で塞ぐと、海に足場を点々と作り、船に飛び乗った。
「いやァ〜。何とか逃げ切れましたねェ」
「そうだね。………　隆樹クン？」
桑田が隆樹の方へ視線を移すと、隆樹は両腕で自らの体を抱き締めるようにしてその場に蹲(うずくま)っていた。
妖は慌てて隆樹の体を揺さぶりながら、名前を叫んだ。
「隆樹？……っ隆樹！！」
しかし、隆樹の目は虚ろで、まったくの無反応だった。

＊＊＊＊　夢の中　＊＊＊＊

（あの後、船に乗った後、俺は……どうしたんだ？）
深い意識の底で、隆樹は必死に頭を働かそうとした。しかし、自分の今いる場所さえも、よく分からなかった。
（俺…　もうこのままでいようかな？桑田さん達のところに戻ったら、煉獄王を倒さなきゃいけないし）
≪ナラ、尚更イケヨ。俺ハ、ソノタメニ　イル≫
（ダメだ。この眼は、そんなことに使うために兄貴がくれたんじゃない）
≪ダガ、煉獄眼(ディスホールド)ハ、ソレヲ望ンデイル≫
（何？）

≪破壊シロ！全テヲ無ニ！我ハソノタメニ存在スル！！≫

（っ……なら、こんな力、いるもんか！）

≪……フン。腰抜ケメ。ナライイダロウ、ソノ望ミ、叶エテヤロウ≫

（え…？）

≪ダガ、貴様ハイズレマタ、我ヲ必要トスルゾ！≫

（まっ、待て…っ）

≪己ノ無力サヲトコトン、嘆クガヨイ！フハハハハ！！！≫

＊＊＊　現実　＊＊＊

意識が浮上した途端、左目に焼きつくような激痛が走った。
「っうぁ…っっ」
「隆樹！？」
「隆樹クン！！」
俺は、左手で左目を抑え付け、痛みに堪えようとした。しかし、あまりの痛みに手を離し、左目は天を仰いだ。
その瞬間、鮮血のように真っ赤な光が、両目に広がった。
煉獄眼から放たれた深紅の光は、真っ直ぐに伸び、空を引き裂いた。そして、左目からは血の涙が流れて、船の上で一瞬結晶化すると、すぐに灰と化して風に流されていった。
やがて、光は消え、俺の左目の深紅の輝きは、どこかへ消えてしまった。
俺は空を仰いで、涙した。

「あぁ…。　空って、　こんなに青かった……のか　…」
そして、気が遠くなった。

＊＊＊　＊＊＊

同時刻　逆京都府

「お？何や、あの光」
「……　神宮寺クン。お茶ごちそう様」
「あれ？もう行ってまうの？」
「うん。　息子が、待ってるから」
縁側に腰掛けていた中年の男は立ち上がって、いそいそと立ち去った。
残された片眼鏡の青年は、溜め息をついて思う。

――――――――――何や、波乱の予感やわ
ア…――――――――――

失った魔眼（後書き）

＊次回予告
俺は、結局兄貴との約束を失くしてしまった。
もう、俺はここにはいられない。
誰か…っ助けてくれ！

「哲平。まだだ」

次回『約束を守れなかった少年』

約束を守れなかった少年

俺が高校に入学すると同時に、
兄貴は大学生となった。

その日、兄貴は家から遠い学校に通うため、
家を出た。

兄貴は最後に俺の頭を撫でて、言った。

「またな！」

＊＊＊　＊＊＊

重い瞼を開き、目の前の白い天井を暫く見つめた。次に、自分の周りの景色を見回し、ここが病室だという答えに辿りつく。徐に手を天井へ翳し、まるでその手にあったものを手探りするように空（くう）を掴んだ。

その時、全部思い出した。隆樹は震える手で左目に触れた。そこには、真っ白な包帯が巻かれていたことにやっと気付いた。

地の底に落とされたかのような絶望感、それを吐き出すがごとく、隆樹の悲痛な叫び声が静かな病室に響いた。

「ぁ…っ、うぁ、うあああぁぁぁぁぁ―――――！！！」

＊＊＊　＊＊＊

逆茨城・逆水戸市
芦原邸

ここは、評議会会長の芦原慧翠の邸宅。その書斎に慧翠と御堂アキラがいた。しかし、いつも穏やかな慧翠は今日は一変してピリピリして張り詰めた空気を発していた。
「アキラ、報告しろ」
「はい。昨日(さくじつ)、午後6時23分頃、逆神奈川・逆横浜の港にて、逃亡中の御堂隆樹と共犯の桑田宗助、内海妖を発見。3人は船で逃亡を計り――――――「そんなことは聞いていないいっ！！」…」
アキラの淡々とした報告を突然慧翠が一喝して中断させた。慧翠は落ち着きがないかのように、持っているペンで机をリズム良く叩いた。アキラはその普段では絶対やらない、イラついている時だけ行うその癖に、眉を顰める。
そして、慧翠がまたもや声を荒げて言った。
「俺は結果だけを聞いている！その後、御堂隆樹はどうなった！？」
「……御堂隆樹は、逆東京の中央病院に移送されました。昨日の時点では、意識不明。問題の空を裂いた煉獄眼(ディスホールド)ですが…、消失した模様です」
簡潔な報告に、慧翠のペンの音は消え、苦痛の表情を浮かべていた。そして、顔を伏せたまま続ける。
「…で、桑田宗助と内海妖は？」
「桑田宗助は自宅謹慎。内海妖は大魔人の方の牢に。それも一時的で、2日後にはどちらも解かれるそうです」
「……そうか。もういい、下がれ」
慧翠はアキラを手で軽くあしらい、アキラは一礼してその場から退いた。
そして、独りの書斎で慧翠はうな垂れていた。と、同時に悔しがっていた。

「っくそ！まさかこんな結果に終わるなんて…っ。俺の完璧な計画が台無しだ！！っ…俺の手の上で踊ることを拒むか……　御堂隆樹っ、いや、高橋哲平っ！！」
慧翠の断末魔に等しい叫び声が静かに木霊する。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

逆東京　逆東京都（の末端の末端）
桑田邸

静かな元アンティークショップの家に、慌しい人物がやって来た。
「邪魔するわよ！桑田」
「あ、羅刹クン！？」
そこへ台風がごとくやって来たのは、歪羅刹だ。何やら今日はいつも以上に不機嫌だった。
「桑田、隆樹はどうなったの？」
その質問に、桑田は口を噤んだ。しかし、隠し立ては出来ない、と思い、口をゆっくりと開く。
「隆樹クンは、煉獄眼（ディスホールド）を失くした。そのため、“御堂隆樹”の名を返上して、ただの人間、高橋哲平に戻ったよ」
「っそんな…！」

＊＊＊＊　＊＊＊＊

あの事件から、一週間が経過した。
哲平は元の生活に戻った。しかし、３日ほど放心状態で、暫く学校を欠席していた。だが、今ではやっと上辺だけでも明るく振舞えるまでに回復した。

時々、学校で羅刹に会うが、哲平の嘘の笑顔が嫌いなのか、態度は素っ気なかった。

これでいいのだと、哲平は自分に何度も言い聞かせた。でも、傷は消えなかった……。

ある日。哲平がベッドに入り眠りにつくと、不思議な浮遊感を感じた。哲平はそれをすぐに夢だと思った。

「…哲平、おい起きろ」

聞き覚えのある声に哲平は急ぎ起き上がった。

と同時に、鈍い痛みが頭に走った。その横には男が倒れ込んでいる。どうやら、声の主と頭突きをかわしてしまったらしい。

「いってェ…っ」

「いてて…。まったく、相変わらずお前は落ち着きがないなァ…。なぁ？哲平」

起き上がった男。その人物に、見覚えがあった。写真で。実際に見たこともあったが、記憶が曖昧。

「あ……と、父さん！？」

「そう。久し振りだね。高橋竜胆（たかはしりんどう）、ただいま参上！」

間違いなさそうだった。何故なら、哲平の実父にしてツバサの義父は、病的なほどの英雄主義（ヒーロー）であるから。正義感だけは人一倍な人なのだ。

「あー……。やっぱ夢か。だよなァ。父さんは１２年前に事故で亡くなったんだ。確か、通勤途中に小学生を庇って車に轢かれたんだったよな。そうだ、これは夢だ！」

「確かにこれは夢だが、僕はお前の夢じゃないよ。逆京都の管理者の能力『夢路人（ドリーム・クロウ）』でお前の夢にやって来たんだ」

「え…　逆京都？父さん、逆世界にいたのかよ！？」

「まぁね。　…さて、本題に入ろう。まず、お前に種明かしをしなきゃね。僕の高橋竜胆の名は人間としての名前。僕の魔人としての

名は、桑田宗明（くわたそうめい）。正真正銘、桑田宗助の実の兄だ」

　哲平はもう呆然とするしかなかった。

――――――――父さんが、逆世界の

管理者ァ！？――――――――

約束を守れなかった少年（後書き）

＊次回予告
死んだはずの父さんが僕に問いかける。
「もう一度、あの世界に戻りたいか？」と。
もう僕には力はない。それでも、もう一度〝俺〟に戻れるなら…っ

次回『エピローグ』

エピローグ

僕の家族は、至って普通だった。

父さんは保父さんで、子どもに大人気だったのを憶えている。

母さんは近所付き合いの良い普通の主婦。

兄貴は本当は魔人だったが、普通に学生やっていた。

僕もどっちかっていうと、普通だ。

なのに…。

＊＊＊＊　＊＊＊＊

僕、高橋哲平の夢の中に死んだはずの父・高橋竜胆（たかはしりんどう）が現れた。そして、彼は自分が桑田宗助の兄・桑田宗明（くわたそうめい）だと名乗ったのだ。

哲平は呆然とした。まさか兄だけでなく、父までもが僕の知らない間に逆世界と関わっていた。

「えっ…？ホントに……？」

「あぁ、もちろん。今はただの人間の魂魄。ツバサのことも知ってた。その上で、彼を家族にしたんだ」

「兄貴のことも…」

「…さて、本題。哲平、お前は“御堂隆樹”に戻りたいか？」

この言葉に哲平の表情が凍りついた。

戻りたくない、わけない。戻って、羅刹や妖たちと楽しくやりたい。けど…

「…無理だよ。もう僕は魔人じゃない。ただの人なんだ」
「うん、今はね。でも、特訓次第でお前は元の生活に戻れる」
「え！？」
「煉獄眼は戻らなくても、お前の中には管理者の力が眠っている。これを覚醒させれば、お前は魔人に戻れる。どうする？二択だ」
このまま人間として、普通に生活していくか、
それとも、もう一度魔の世界で非日常を送るか。
竜胆は右手のピースを哲平の目の前で主張して言う。二本の指を凝視して唖然とする哲平は、一旦瞼を閉じると、強気な笑みを浮かべる。
「…フッ。そんなの決まってるよ。僕は……、いや、“俺”の答えは決まってる。俺は隆樹に戻る。だって、俺たちは逆世界から、逃れる事なんて出来ないんだ」
「…あぁ、そうだな。なら、話は早い。もうすぐ夏休みだろ？長い休みを利用して、逆愛媛の管理者のところに特訓しに行け」
「あぁ。分かったよ、父さん」
「じゃあな。元気でな」
竜胆は哲平の頭を大きな手で撫でると、霧の中に消えていった。

＊＊＊＊　現実　＊＊＊＊

意識が浮上し、目覚めたのは見慣れたベッドの上。すべては夢。だが、嘘でも虚構でもない。父は確かにいて、自分に道を教えてくれたのだ。
今日は夏休み前日。いつもより学校にいる時間が短い。哲平は学校が終わったら、何泊をする準備をしなければいけない。なにせ、能力が覚醒するには相当の時間がいる。いつまでかかるか分からないから。
それでも、何もやらないよりはマシだ。

哲平はもう、虚ろな目をしていなかった。その決意に満ちた目は、どこかツバサに似ていると、誰かは思う。

＊＊＊　＊＊＊

逆世界
逆四国・逆愛媛県

大きな和風の屋敷に、一通の手紙が届く。それは、屋敷の主の手に渡った。
「姐さん！」
「おう！何だ、手紙か？」
「はい。桑田宗明からです」
「宗明…。そうか。ごくろう、下がっていい」
「はい」
主は部下を下がらせ、手紙の封を切った。そこには、哲平のことが書かれていた。
『急で悪いが、明日、私の息子・高橋哲平が尋ねてくると思う。アイツは、君たちの間で噂になってる“御堂隆樹”の名を取り戻そうとしている。だから、手伝ってやってくれ。アイツの中に眠る管理者の力と、他の未知なる力を覚醒させてやってくれ。　桑田宗明より』
「ふーん。アイツの息子か…。　面白い！みっちり鍛えてやるよ！」
楽しそうに笑う主のもとに、一人の男性がやって来て何事か、と首を傾げる。
「姐さん、何か変だよ」
「湊（みなと）、お前を含む護柱（ナイツ）全員に通達。“客が来る。高橋哲平、または御堂隆樹と名乗る者が現れた場合、速やかに屋敷に通すように”だ。ＯＫ？」
「御堂隆樹って……、煉獄眼の？」

「そうだ。久し振りに、楽しくなりそうだ」
主はまたニンマリと笑った。

＊＊＊　＊＊＊

現世
高橋家

哲平が荷物をカバンに詰めているのを母の耀子（ようこ）がソワソワしながら見ている。
「哲平、ホントに大丈夫？」
「大丈夫だよ、母さん。部活の合宿で、夏休みギリギリまで田舎に行くだけだよ。携帯が繋がるか分かんないけど、先生も一緒だし、平気だよ。いつまでも子どもじゃないんだ！」
「…分かったわ。気をつけて、行っておいで」
耀子は笑顔で哲平を見送ると、玄関先で溜め息を漏らしつつ微笑んだ。
「まったく。あの人やツバサに似て元気なんだから…」

――――――――――ねぇ、私と哲平は、元気よ。アナタ――――――――――

エピローグ（後書き）

とりあえず、Ｗの章はこれにて終了！
それでは皆様、良いお年を！！

プロローグ（前書き）

皆様、明けましておめでとうございます。
今年もなにとぞ、よろしくお願いいたします。

プロローグ

昔、独りぼっちの管理者がいました。

独りぼっちの管理者は、いつしか孤独に耐えられなくなり、

自らの髪の毛一本と血液一滴で、一人の“人間”をつくった。

これで独りではなくなった管理者は、幸せに暮らしました。

めでたし　めでたし

＊＊＊　＊＊＊

不思議な余韻の残る夢を見た。良い夢なのか、悪夢なのか、分からない夢。でも、酷く魘された。

本に囲まれ、もうベッドのではなく本の上で寝ている状態の桑田宗助の寝室。宗助は眠る前に本を読むため、その結果寝室は本の樹海と化していた。

宗助はだるい体を無理やり起こして、顔を洗いに洗面台へと向かった。そこには、昨日風呂に入った後、置き忘れたと思われる愛用の眼鏡が放置されていた。

これを見るたびに、昔のことを思い出して眉を顰める。この伊達眼鏡は、元々自分のではないのだから。

＊＊＊　回想　＊＊＊

あれは今から何十年も前。逆世界は、ある話題で持ちきりだった。
歪蘭星と御堂アキラに、長女の歪蘭玉が生まれたのだ。家を継いで魔王の妻になることもない次女の蘭星は自由だった。蘭星は大魔女に君臨し、逆長野の管理者・御堂アキラと結婚し、そして長子の歪蘭玉が生まれたのだった。
逆世界中の人々が大いに喜んだ。

そして、ここは逆東京。
桑田家は、逆東京の窓口であり、役所。しかし、普段はアンティークショップだった。
リビングにはコーヒーの香りが漂い、焼けたパンの匂いが食欲を湧かせる。一人の少年がテーブルの上に朝食を2人分並べる。時計に目を向けると、もう8時を過ぎていた。しかし、もう一人が未だ夢の中であった。
そして、本に埋もれた寝室に向かい、ベッドの上の膨らみを揺すって呼ぶ。
「兄貴。兄貴！起きろよ！朝だぞ」
「……………あと1時間…」
「馬鹿！朝食冷める！俺先に食べちゃうよ？」
「それは……　だ、め」
「じゃあ起きろ！はい、10、9、8、7　…」
「分かった！分かったから！！」
「…　おはよう、宗明兄さん」
「…おはよ、宗助」
この青年は、桑田宗明（くわたそうめい）。旧逆東京の管理者であり、逆東京初代である。歪羅衣と煉獄王の事件「業火の惨劇」以前からこの逆世界に存在する古株である。でも、どの人にも敬語を使い、腰が低かった。

そんな低姿勢が、弟の宗助は好きじゃなかった。
　宗助は、事実上弟というのには誤りがある。宗助は、宗明が管理者になった時、親類が一人としていなく、跡を継ぐものがいないため、宗明が自分の髪の毛一本と血の一滴のＤＮＡで宗助を自力で創り出した。創られた宗助は赤ん坊から宗明に育てられ、兄であり、父とも呼べる存在だった。
　宗明の死後、逆東京の管理者の座と「正義感」の感情を受け継ぐ。管理者の一族はそれぞれ一つずつ神の感情を司り、桑田家は正義感を司っている。それを受け継ぐことは、管理者の座を引き継ぐことに等しい。そのため、宗明は宗助の師でもある。
　普段だらしない宗明の代わりに、宗助が家事を行っていた。それが普通であり、当たり前の日常。

　朝食の食パンに苺ジャムを塗りたくる宗助と、バターだけでコーヒー片手に新聞を読む宗明。宗助は年相応なのか、少々甘党。
「……宗助。朝食が終わったら、鍵の力の練習だ」
「…わかった。兄貴は？」
「俺は書類整理。それと、逆長野の津塚(つづか)さんに報告書、出さないと」
「…　兄貴、それやめない？」
「ん？」
「敬語。兄貴って、管理者の中じゃ一番の古株なんだろ？何で年下に敬語使うの？堂々としてろよ」
　宗助は苺ジャムたっぷりのトーストを口に含みながらそう言った。宗明は一度新聞から視線を外して、どこか哀しい表情をして言った。
「…宗助、俺は負け犬なんだ。“業火の惨劇”の時、俺と他の管理者は逆世界を守るために戦った。それで津塚の若当主の爺さんは死んだ。なのに、俺は生き残ったんだ」
「は？別にいいじゃねぇか。生き残れたんだぞ？」
「宗助。確かに生き残れたけど、それは俺にとっては屈辱なんだ。俺の正義感(プライド)が許さない。それに比べ、死んだ彼等は今や英雄として

名を残している。俺は未だ、生かされた意味を見出せずにいるんだよ」

「…相ッ変わらず、よくわかんねぇ」

「ハハハ。お前も、この感情を継げばわかるよ」

そう言って宗明は、口の周りにジャムを付けた宗助をクシャッと撫でた。

これが、俺たちの日常。ずっとこのまま、この時間が続くのだと思っていた。

しかし…

――――――――――――何かが、動き出した…――――――――――

プロローグ（後書き）

＊次回予告

俺と宗助しかいないこの家に、突然やって来たのは、一人の少女。
車椅子を動かす少女。
その少女の名前は…

次回『車椅子に乗った少女』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8349c/

東京HEAVEN

2012年1月9日12時51分発行